

魔法科高校の滅龍魔法師

チート大好きマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遙か昔から存在していたフォルティシム・カラミティー、彼は不老不死で龍すら滅ぼす威力を持つ滅龍魔法の使い手だった。永い時を生きている彼は自身の欲の為に行動する。世界最強の力がどのように世界に影響するか、それは本人さえも分からない

目次

暇だったから艦隊潰しました	1
四葉家にダイナミックエントリー	13
「四」の次は「九」、初めての学校	26
ピッカピッカの！一年生！（大声）	37
日本の未来は、君たち（十師族）に掛かっている！	52
嘸ませはやっぱり嘸ませで不憫	64
次回！服部死す！	79
首の後ろをトンツ	94
四葉って行動力凄い	103
『ブランシユ』	116
グツと引いて伸ばしながら拳を捻る	126
王の雫	134

暇だったから艦隊潰しました

1999年、核兵器テロを未然に防いだ超能力の研究が始まり、その研究はいつしか「魔法師」としての優れた血筋に舵が取られ現代の魔法社会が確立している

では何故超能力者は表舞台に姿を現してまで核兵器テロを防いだのか。世界の危機を見過ごせない正義感からか、はたまた自分たちが表舞台で力を示すチャンスだと思つてのことか

真実はそうではない。正義感でも力を示したい欲でもない。ただ身近に核兵器よりも容易く世界を滅ぼせる者がいて、そいつが激怒りして暴走しそうだったからだ

その者は青年で、数多の龍の力をその身に宿していて、大昔にその力を使つていくつもの国を滅ぼした「生きる厄災」と呼ばれていたのだとか

この話は現代の魔法師達も知っている有名な話である。もともと超能力者の出現理由に関して多くの考察、分析がされる中である国で発見された古い日記の内容が世界中に広まって出来た噂程度にしか思っていないが

しかし、世界中の魔法師がこの噂が本当で、あの日記には極々一部しか記されていない。実際はもっとヤバくて理不尽なものであると知る日はそう遠くない

ここはある山の中、一人の青年が巨大な岩の前に立っている

「オラアアアアアアアア!!!」

一心不乱に巨大な岩に拳を打ち付けていた。彼の周りを見てみると、そこら中に同じくらいの大きさの岩が転がっている。全てくつきりとした拳の痕が無数についた状態で。本来岩を砕く際は打ち付けた痕の周りにヒビが入っているはずだが、転がっている岩にヒビは一切無い。キレイに拳の痕のみがついている

「ふう……」

なんと修行をしていたようだ。どう見ても狂った人間がただ岩を殴っているだけだったが

巻き上がった砂埃が晴れて現れた彼は、月明かりに照らされて青黒く光っている艶のある肩甲骨の上辺りまで伸びた髪に、黒い瞳、裸の上半身は鋼と言ってもいいぐらい余分なものが削ぎ落とされ、引き締まっている。キリツとした目と合わせれば、1000人が100人イケメンという顔立ちの彼こそ、「生きる厄災」ことフォルティシム・カラミティー

人類最古にして最強の滅龍魔法使いである

魔法で最強のフォルティシームが何故武術や武器術といった徒手空拳の修行をしていたのかという……ズバリ、暇だからである。不老不死という永遠の時間を得たフォルティシームはあらゆる事、分野に手を出した。何をしてもだいたい三日で止めていた彼が唯一続けたのが修行だった。武器術、武術、銃の扱い、自分自身の強化、戦闘に關わる事を極限まで極めた。その結果、国を滅ぼした時より数倍強化された厄災が誕生してしまった。世界の皆さんご愁傷さまです

そんな世界最強を更新し続けるフォルティシームでも勝てないものがある。それは「退屈だ……」

彼が嫌いなもの

- ・弱いくせに威張ってるやつ
- ・上から物言ってくるやつ

・退屈

そして今現在、修行を終えた彼は絶賛退屈の中にいた

「はあ~~~~、どくすつかなく~~~~、どつか行くか?……でも日本はほとんど周ったしな~~~~」

しばらく仰向けに寝転がりながら考えて、瞑った目を開けて言う

「……沖繩行！」

五回目の沖繩旅行に行くことにした。移動手段は自分で飛行

「到着つと」

人気の無い海岸に着地、今は時期的にも海は人が多いと思っていたがなんか人が少ないか？ それに来る途中の海で艦隊みたいな船の群れを見たんだが。もしかして最悪なタイミングで来た？

「あ、さっきの船だ」

沖の方を見てみると途中で見た艦隊が目視出来る位置まで来ていた。すると突然ドーン！ドーン！という音が鳴った。あの艦隊が砲撃を開始したのだろう。そういやあの船砲台あつたな

「君イ！そこは危ない！すぐこっちに来るんだ！」

ん？なんか軍服みたいなの着たおっさんがなんか言ってるな

「あんだつてえー！？」

「だから！そこにいたら危ないからこっちに来るんだ！」

「あんだってえー！？」

「だ・か・ら！危ないからこっち来いって言ってんだよ！」

「あんだってえー！？」

「いいからとつとこつち来いやあああああ！！！」

そんなコントを繰り返していると自分の頭上に飛んできた砲弾が

「あ」

二人の声が重なった瞬間

ドオオオオオオオオオオン!!!

俺に着弾

「……………大丈夫かあああああ!!!」

「あ〜〜ビツクリした」

「いや何で生きてんだよ！」

「なんでって、ダメーじゃないからだろ。失礼なおっさんだな」

「いやだつて！砲弾が直撃したんだぞ!?普通なら木っ端微塵に吹き飛んでる筈だぞ！」

「まあ俺だし? いいじゃん」

「それで片付けんなよ！」

「このおっさん、ノリ良いな。面白いぐらいツッコミしてくれるし

「とにかく、ここは危険だ！もうすぐ俺の仲間がああ艦隊を撃退してくれる。それまでシエルターにいるんだ」

「いやいいよ。攻撃食らったのは俺だし、俺が片付けるよ」

「……なに？」

「だから、俺がああ艦隊沈めてくるって」

おっさんは俺の目をじっと見つめてくる。おいやめろよ、恋が始まっちゃうだろ。誰の得にもなんねえから見つめるのやめろ

「……本気で言ってるのか？」

「嘘でこんな事言える人間いると思う？」

まあ俺人間辞めちゃった側ですけど

「……流石に俺だけじゃその判断は下せない。俺と一緒に来てくれ、俺の上司に会って判断してもらおう」

「そんな時間無いと思うけど、いいよ」

「よし、行こう。たぶんああ艦隊を沈める為の狙撃ポイントにいるはずだ」

そのままおっさんと車に乗って移動して、連れてこられたのはさつきいた砂浜の上にあつた崖。そこには風間っていうおっさんの上司と中学生ぐらいの子供が一人

「真田、頼んでいた物は持ってきたか？」

「は！射程伸長術式を組み込んだ狙撃用CADです」

「よし、ではこれを使ってあの艦隊を沈めるぞ！……それで真田、その彼は？」
やつと俺の話題か

「どうもどうも、私、フォルティシム・カラミティーと言います。実はですね、あの艦隊から砲弾を浴びまして、ついにはその御礼をしたいなと」

砲弾を浴びたの部分の部分を聞いた瞬間、風間と中学生の顔が面白い事になった

「……真田、彼が言っているのは本当か？」

「信じられません。が事実です。自分もその一部始終を見ていましたから」

「……………」

そんな品定めするみたいな目で見るなよ気持ち悪い

「……分かった、だが初撃は君ではなく彼の役目だ。君にはもし第二陣が来た時の為に待機してもらおう」

「チツ……分かったよ」

あくあ、折角スッキリ出来ると思ったのに。こうなるなら独断で消しとくんだった
中学生は渡された機械で射程を確認しているがどうやら20kmまでしか届かないらしい。にしてもあの中学生、なかなか良い目と能力持ってたな

てか20kmって、こっちに砲弾飛んで来んじゃん。あくメンドクセ〜

「フォルティシーム…フォルティシーム！」

「はいはい」

あまりに面倒くさすぎて話聞いてなかった

「君なら砲弾を防げるか？」

「出来ますけど」

即答してやった

「それとそこにいつの間にかいる女の人、あんたは下がれ。これ以上魔法使うと寿命縮むぞ」

「…なんでその事を……」

「は？見てれば分かるだろ。いいから下がれ、足手まといになるだけだ」

「くっ……分かりました」

さてと、久しぶりにいきますか

「モード・大気龍」

「……空気が変わった」

大気龍は文字通り大気を操る能力を持っている。これで俺達の周りを大気の壁で覆う

「『大気龍の真空障壁』」

両の掌を合わせて合掌の構えから技を発動

「俺達の周りを真空の壁で覆った。撃つときは言え、お前の銃口付近だけ解除する」

「……感謝します」

「とつとと終わらせろよ」

近場にあった岩に腰を降ろして状況の推移を見る

数分後、中学生から障壁を解除するよう言われたので銃口付近だけ解除

発射された魔法は的確に艦隊を撃破、直後その衝撃の余波で発生した津波が迫る

「津波だ！退避！」

「モード・大地龍」

俺の呟きが聞こえたのか、退避行動をしていたみんなが動きを止める

しやがみこんで地面を両手で触れる

「『大地龍の地盤隆起』」

辺り一帯の地面が急激にせり上がって津波を回避出来た

「……こんな事が出来るなら言ってくれ」

「言う時間なかったからな」

だからお前らみんなして睨んでくるな

「……なあ、お前つてもしかして」

「その話は後、どうやら俺の出番みたいだ」

「どういう」

事だと言う前に風間や真田が持っていた無線機に連絡が入った。第二艦隊が沖合に出現したらしい

「……フォルティシム、どうやら君の出番のようだ」

ははっ！ようやくか！

「任せろ」

興奮してどんな顔してるか分からないけど、多分笑ってるんだろうな

「一応離れてろ。津波ではなく衝撃波でふっ飛ばされても知らないからな」

「分かった。総員！すぐにここから距離を取れ！巻き込まれるぞ」

あいつらが離れたのを確認してから空に上がる

「さあ悪いがお前らには八つ当たりにつき合ってもらおう……モード・溟海龍」

両腕を大きく広げて言う

『溟海龍の大海断絶』

艦隊がある海がまるでモーセが海を割ったかの如く割かれた。その裂け目に重力に逆らえず落ちていく艦隊、全て落ちたのを確認して海をもとに戻す。今頃は深海の水圧

で人間諸共ぺしゃんこになっているだろう

「はい完了」

いや〜久しぶりに溟海龍使えてスッキリしたわ〜。もーどろつと

「終わったぞ〜」

「お前…ほんとに人間か？」

またその話かよ。まあいいや、ほんとの事話すか

「まあ半分正解かな？」

「半分？」

「教えてくれ。君は何者なんだ」

「俺の名はフォルティシーム・カラミティー。人類最古にして最強の滅龍魔法の使い手だ」

ふふん〜どうだ！いい雰囲気かカッコいいだろ！さあどんな顔を

「何言ってるんだお前」

「人類最古って正気か君は」

「……………」

何馬鹿な事言ってるんだって顔すんなや！あとその中学生と女！黙って変な目で見てくんない！

「信じてねえーな！」

「当たり前だろ。むしろこれで信じる奴がいると思ってるのか」

「確かに、俄には信じられないな。何より証拠が無い」

「だったら知ってそうなる奴に聞いてみるよ！ フォルティシム・カラミティなんて聞いたら絶対スゲー反応させるから！」

「……」

「その可哀想な奴見る視線やめろやー！！！！」

その日起きた大亜連合による日本侵攻の沖繩戦で使われた魔法は、この世に存在しない魔法として世界各国が躍起になって使用者を確保しようと動き出した。その相手が国一つ程度なら軽く滅ぼせる力の持ち主とは知らずに

四葉家にダイナミックエントリー

沖縄での一件から数日、自分の島で変わらず暇な日常を過ごしていた

「平日の昼間からゴロゴロ〜ゴロゴロ〜、あゝあ、世界の危機とか起きね〜かな〜」

某芸人の鉄板ネタをやってみるも実際に起きるわけもなく

「……平日の昼間からゴロゴロ〜ゴロゴロ〜、あゝあ、家のインターホン鳴らね〜かな〜
「ピンポン！」……マジで来た」

突然の訪問に居住まいを正して真剣な時のようなキリツとした目をして玄関を開ける

「どちら様で？」

「初めまして、私葉山と言います。こちらにフォルティシーム・カラミティー様がいるとお聞きしたのですが」

「フォルティシーム・カラミティーは俺だが、立ち話もなんだから上がっていけ、茶ぐらい出すぞ」

「ではお言葉に甘えて失礼します」

外にいた葉山という初老の男性を家に上げたフォルティシームは内心久方ぶりの来

客にテンション上がりながら準備をした

「日本茶でいいか？」

「お構いなく」

二人分の湯呑に丁寧日本茶を注ぎテーブルに置く

「ズズ……素晴らしい腕ですね。渋みの中にしつかりとした甘みを感じます」

「良い茶葉だからな。それで葉山さん、あんたは何故俺の所に？というかどうかやってこの島を見つけたんだ？」

「私には情報の正確さに定評がある情報網がございまして、そこで得た情報を頼りにこの島を見つけました」

なるほど、独自の情報網を持っているのか。相当優秀な情報屋を抱えてるんだろな
「この島に来た理由は分かった。次は俺に用があつて来たんだろ？俺をフォルティシーム・カラミティーだと知っていながらも」

「はい、ここに来たのは、あなたに我が主人とその家族を救って欲しいのです」

「……詳しく聞こう」

それから葉山は事の詳細を明かした。自分の主人は訳あつて子供が産めない体になつてしまったこと。その姉は生まれつきの体質のせいでも今にも衰弱死しそうになつている事。さらにその姉の子供は、生まれつき途轍もない力を有していてその異常性が

ら他の者に白い目で見られている事など全てを語った

「大体分かった。俺はその姉妹の治療と姉の子供の待遇をどうにかすればいいと」

「もちろん相応の報酬はお支払いします。どうかお願い出来ないでしょうか」

「フォルティシームは数秒考えてから答えを言った

「姉妹の治療に関して俺に全て任せてくれるならやろう」

「では子供の方は」

「そつちは俺の出る幕じゃない。お前たちで解決しなければイタチごっこでいつまでも
続くぞ」

「……やはりそうですか。では治療だけでもお願いします」

「いいだろう。そうと決まれば早速行こう、俺が運んでやるから場所をナビしてくれ」

「運ぶって…どうやって行くつもりですか？」

「そんなの、空飛んでいくに決まってるだろ」

「……へ？」

有無を言わず葉山をお姫様抱つこの形で胸の前で抱え、空を飛んで葉山のナビ通り
進む

「あの村か？」

「はい！あの村が私の主人のいる村です！」

「そうか、じゃあ行こうか」

「あの！どうやって入るおつもりですか!？」

「ダイナミック入村だ」

「何言ってるんですか!？」

ダイナミッククローリーエントリーイイイイ!!と叫びながら一際大きい家の前に着地。
葉山はあまりの衝撃とスピードに軽く気を失っていた

そんな訳で葉山さんのナビで来たんだが、ここ誰の家だ？

「貴様！何者だ!！」

「おいあそこ！葉山様が倒れているぞ!！」

「葉山様に何をした!！」

今の騒ぎを聞いて群がってきたのか、どうやら俺が襲撃者だと勘違いしているようだな」

「待て待て落ち着け、俺はただ葉山さんに頼まれてここに来ただけであつて別に襲撃しに来た訳じゃ」

「黙れ！この状況でそんな言い訳が通用すると思ってるのか！」

「今すぐ葉山様を解放しろ！」

「だ〜か〜ら〜、俺は誘拐犯でも襲撃犯でもブツ！」

話している途中で顔面になんか食らった。空気の弾か。……下手に出てれば調子乗りがあって

「……おい、今俺に空気弾撃ったそこのお前」

「！な、なんだ！」

「この俺に先に手を出したんだ……死ぬ覚悟は出来てるんだろうな」

「ヒッ！」

久々にキレちまったよ。これは仕方ないよな、悪いのは俺じゃなくて先に手を出したあいつなんだから

「今から三秒でお前の両手足を粉碎する。せいぜい足掻いてくれ」

「何を言っているんだ！たつた三秒でなんて「グシャッ！」……へ？」

男の両腕と両足は向いてはいけけない方向に捻じれ曲がっていた

「ぎやああああああああ!!」

「なっ?!いつの間！」

「次はお前らだな……モード・劫炎龍」

片方の掌を空に向けて、その上に極大の炎の玉を作る

「契約は破棄だ、お前ら諸共この村ごと灰にしてやる」

炎の玉はどんどん大きくなっていく。玉の成長が止まったところでそれを投げようとする

「劫炎龍の獄炎「お待ち下さい！」……なんだよ葉山さん、今いいところなんだから邪魔すんなよ」

「何卒ご容赦を！今回の事は明らかにあの者の落ち度です！ですので、今回の罰はあの者だけでご納得頂きたい！」

「……いいだろう、今は葉山さんの顔を立ててやる」

「申し訳ありません！」

葉山さんがここまで言っただけ、流石に断るのもあれだしな。それによく考えたら俺に空気弾撃ったのあいっただけだし

「ふう……じゃあここでやるから。それぐらい許してくれるよね」

「……それぐらいなら」

「じゃあ葉山さんはそこでボケつとしてるそいつら連れてどっか行つといて。終わったら行くから」

「分かりました」

ガクガクに腰抜かした他の奴らを立たせて葉山さんが行ったのを確認してから手足グチャグチャの奴に目を向ける

「おいボロ雑巾、お前に選択肢をやる。よく考えて選べよ」

「!!」

痛みで喋れないのか首を凄いい勢いで縦に振っている

「1, サンドバックで撲殺 2, さっきの炎で焼死 さあ選べ」

我ながら絶望的な二択に相手も顔が真っ青だ、でもしようがないよな自分で攻撃したんだから

「た、たす、助けて下さい！まだ死にたくない！」

「……は？今更命乞い？」

「元はと言えばお前が悪いんだ！正規の入り口で入って来ないから！」

おいおいこいつ馬鹿か？葉山さんが側にいた時点で気付けるだろ

その後もずっとギヤーギヤー喚いていて耳障りになってきたので、一撃で終わらせる事にした

「じゃあさよなら」

心臓に向けて拳を打ち込む。男の体を貫通して地面にまで到達するほどのスピードと威力で地面にひびが入る

「死体は劫炎龍の力で灰にして処理完了。葉山さんのところへ行く」

「葉山さくくん、来たよ〜」

「お待ちしていました。こちらへどうぞ」

着地した場所の目の前にあった大きな家に入ると葉山さんが待っていた。家へ上がり、葉山さんの後に続いて行く

「なあ葉山さんここってあんたの主人の家なんだよな」

「そうですね」

「名前はなんてんだ？」

「……私の主人はここ四葉家当主の四葉真夜様になります」

「へえ〜ここが四葉の村なのか〜」

「……驚かないのですか？世間からアンタタッチャブルと恐れられているのに」

「全然、だって葉山さんが四葉の関係者って知ってたし」

「な!?!……いつからですか？」

「俺があんたの事見た時」

「……そうですか。こちらの部屋になります」

話している内に着いたらしい。なんかここだけ高級感溢れ出てんな

「中で真夜様がお待ちです。私はお茶の準備をしますので」
「了解」

葉山さんはお辞儀をして下がっていった

「すいませくん、葉山さんと呼ばれて来ましたフォルティシーム・カラミティーです」
「どうぞ、お入り下さい」

中から女の声が入っていいと言われたので、襖を開けて中に入る

「ようこそいらつしやいましたフォルティシーム・カラミティー様。私が四葉家当主の
四葉真夜です」

「あんたが四葉真夜か」

「ええ、人類最古にして最強の魔法使いさん」

「そこまで知っているのか」

「この度は分家の者が失礼しました。彼等にはキツク言っておきますので」
「構わねえよ、攻撃してきた奴はこっちで始末したから」

「そうですか」

「この女、さつきから俺から目を離さねえな。品定めでもしてるつもりか？」

「葉山さんから話は聞いてるだろ、どうする？すぐやるか？」

「私の体の治療ですね。是非お願いします」

「分かった、両側の扉の奥にいる奴らを下がらせろ」

「あら、気づいてらしたんですね。彼等もなかなかの実力者ですが」

「舐めるなよ小娘、この程度で俺を測ろうとしているのならこの場で殺すぞ」

視線が交差する。互いに視線を逸らさない

「……はあ、負けました。あなた達、下がっていいですよ」

気配が遠のいていく、本当に下がったらしいな

「初めからこんな事するな面倒くさい」

「ごめんなさい、つい実力を見たくて」

「はあ……で？やるのか？やらないのか？」

「お願いします。私はどうすればいいですか？」

「そこに横になれば、あと腹を出せ。服を捲るだけでいい」

「……こうですか？」

横になって恥ずかしそうに腹を出している四葉真夜

「そのまま動くなよ……モード・慈愛龍」

右掌を四葉真夜の腹に添える

「んっ」

変な声出すんじゃないやねえーよ

「『天恵』」

淡い光が四葉真夜の体を包み込み、消えていく

「終わったぞ」

「……特に体に違和感は無いわね」

「そりや体の内側だからな、ちゃんと検査しないと分かんねーよ」

「そうなのね、あなたの目から見てどう？」

「完璧に治ってるな」

さっきまで機能不全だった部分の機能が回復してる。俺の目ではそれが見えている

「次はお前の姉だな。何処にいるんだ」

「……姉さんは旧第四研究所の医務室にいるわ。私が連れて行きましょう。葉山さん」

「ちようど今紅茶をお持ちしましたが」

「それは後でいいわ。彼と一緒に姉さんのものに行きます。ついて来て下さい」

「かしこまりました」

葉山さんが淹れてくれた紅茶も大いに興味をそそられるが、今は契約が優先だな

彼女の後をついて行って、村の外れにある大きな施設に到着した。ここが旧第四研究

所なのだろう

「ここに姉さんがいます。入りましょう」

ドアをくぐると、そこにはベッドで寝ている女がいた。彼女が四葉真夜の姉の
「彼女が四葉深夜、私の姉です」

やっぱりそうか、それにしても体の中がボロボロだな死んでもおかしくねーぞ

「彼女を治せばいいんだな、さっさとやるか」

「……………」

四葉真夜はなにか思うことがあるのかさつきから口数がすくなっているが気にしない。同じように慈愛龍の『天恵』で体を治す

「あとはお前らの仕事だ。喧嘩するなり殺し合うなり好きにしな、俺は帰る」

「待って」

「なんだよ、まだなんかあんのか？」

「……………」

「……………」

「私だつて感謝はします。報酬は何が良いですか？」

「ん〜そうだな〜……………」

「なんか面白そうなら教えてくれればいいや。俺、退屈つて嫌いなんだよね」

「分かりました。ではこれを」

そう言つてなんか機械を渡してきた

「私と個人的にやり取り出来る端末です。あなたなら使い方はわかるでしょう?」

「まあ分かるけど、ほんとに貰っていいの?」

「でなければ面白そうな事が伝えられませんか」

たしかに

「有り難く貰つとくわ。それじゃ」

施設の外に出て空を飛んで家に帰る。今日はいつもよりよく寝れそうだな

後日渡された端末に姉と和解したとの連絡が入った。ご丁寧にツーショットの写真付きで。なんか四葉姉のほうがいいからまた来て欲しいとも書いてあった。面倒くさいから多分行かないと思うけど

「四」の次は「九」、初めての学校

四葉に行つてから数日、真夜は何かと俺に連絡してくるようになった。面白い事があつたら教えろと言つたのに最近は自分の近況報告もしてくる。あいつ友達いないのか？俺が言えた事じゃないが。それと俺があいつを真夜と呼んでいるのもそう呼べと言われたからだ。なんか距離感して嫌だとか、よく分かんねえけど。そんな俺の最近の趣味は専らソシャゲ一筋だ。貰つた端末でゲームが出来ると知つて試しに入れてみたらまあこれが面白い。お気に入りには『青い公文書』と『運命／壮大な指令』だ。キャラもいい、ゲーム性もいい、育成システムもいい、最高のゲームだ。今も家のリビングでひたすら素材集めの周回をしている

『運命』さ、周回に一括機能実装してくれないかな。『青公』みたいにさ

まあ一回一回行くのも面白いんだけどさ、やっぱり速さは重要だよな

「あ、そう言えばそろそろ水着イベントじゃん。課金の準備しとこ」

当たり前のように課金の準備をしようと財布を持って出掛けようとした時 『ピン

ポーン！』

「……はあ、タイミング最悪……どちら様ですか？」

『九島と言う者ですが』

「そんな人知り合いにいない。お帰り下さい」

『四葉に話を聞いて来たんですが』

「真夜に?……チツ」

真夜の名前を聞いてさすがに帰すのはあれかなと思つてドアを開ける

「ありがとうございます。改めまして、九島烈と申します」

「…フォルティシーム・カラミティーだ。入んな」

また初老の爺さんかよ、俺は爺さんに縁かなんかあるんか

爺さんをソファに座らせて前に茶を置く

「真夜から話聞いてんなら俺の事も知つてんだろ。目的は何だ」

「真夜と深夜は私の教え子でしてね、彼女たちの体質を治したあなたにお礼をと思いま

して」

「おい爺さん、思つても無い事言つてんじゃねえよ。言いたいことがあるなら直球で来いや」

笑つて誤魔化していたのだろうが俺には通用しない

「……私達現代の魔法師が使う魔法は研究された超能力、世の中の事象を改変して行使するもの。しかしあなたの使う魔法は完全に世の中の理を無視している」

俺は黙って爺さんの言うことを聞く

「沖縄での事は風間から聞きました。空を飛び、地面を隆起させ、海を割いた。今世界はあなたを血眼になって探しています。もちろん私もその内の一人です」

「……俺を殺すか？」

爺さんを睨みながら威圧を込めた口調で問う

「いいえ、あの日記が本当ならあなたを殺すのは無理です。なので、あなたには日本国で戸籍を得て貰いたい」

「俺に日本に属せと言うのか？それで俺にメリットは？」

「……日本の学校に通えます」

「……学校だとお？」

学校なんて……学校なんて……

「最つつつつ高に面白そうじゃないか!!」

学校！良いじゃないか！スゲー面白そうだ！

「どうすればいい!?今すぐに戸籍作ればまだ間に合うよな!？」

「え、ええ、今作れば来年の入学式は出れますが……」

「学校か！前は学校なんて行けなかったもんなく。そもそもなかったし。どんな場所なんだろうな〜」

いやー！ワクワクしてきたー！！

「今日は戸籍をデータ化して管理しています。登録はこちらでやりますので情報だけ教えて下されば」

「オッケー！」

るんるん気分で自分が分かる情報は全て教えた

「ありがとうございます。これでパーソナルデータを作ったらまた連絡しますので」

「おう！よろしくな爺さん！」

爺さんは俺に自分の連絡先を教えて帰って行った。楽しみだなく、長い人生の中で初めての学校だからなく……そう言えば、なんか忘れてるような。爺さんが来る前、何しようとしてたんだっけ……まいつか、ゲームゲーム

あれから数日、爺さんからパーソナルデータが出来たと連絡があった。これで俺も日本国内に住める事になったので引越しをする事にした。ずっとここにいたから愛着が無いわけじゃないが、やっぱり利便性は重要な事だよね
てな訳でどこか良い物件無いか真夜に聞いてみたところ

『なら、私の甥と姪が住んでる家の隣はどうかしら。土地なら空いてるし』

との助言を頂いたのでそこに即決。手続きは何故か真夜が終わらせていた。行動が早すぎて逆に引くわ。なんかもう家も建つてゐるらしいし

で、今はその出来た家に来ているんだが

「でかくね？」

明らかにデカい、一人暮らしの青年では持て余すぐらいに。これ何階建てだ？三階ぐらいあるんじゃないか？

中に入ってみると分かった

「……これ地下室込で四階建てかよ。あと地下にあつたあの通路どこに繋がってんだ？」

真夜、お前これ建てるのに一体いくら使つたんだ。あとこれを数日で建てた業者の人よ、誠に申し訳ありません。次回からは頼まないようにしますから

色々言いたいことはあるが、建ててもらつたのに文句は言えない。なので仕方なく荷物を解いて並べていく。家具は備え付けという高待遇、なので前の家から持ってきたのは爆買した漫画とゲーム、後は少しの食器や調理器具に生活用品。手荷物が少なくてもここまでスムーズに運べたよ

「よし、荷解きも終わつたし真夜が言つてた甥と姪のところ引越しの挨拶でもする

か」

歩いて数秒の隣の家に挨拶に行く。確か名字は『司波』だつて言つてたな。えゝつと、てことは右の家か

「すいませ〜ん、今日隣に越してきた者ですが〜。引つ越しのご挨拶に来ました〜」

『ご丁寧ありがとうございます。今伺います』

インターホンから聞こえたのは女の声、てことは今のが真夜の姪か

「お待たせしました。この家の住人で司波深雪と言います」

「どうも、隣に越してきたフォルティム・カミーラと言います。こちら、つまらないものですが」

「まあ、ご丁寧ありがとうございます」

感じの良い女性だな。黒髪ロングでお淑やか、大和撫子つて言葉が似合う感じだな

「深雪、誰か来たのか？」

「あ、お兄様、今隣に引つ越してきた方がご挨拶にいらして下さつて」

「そうでしたかご丁寧につて……あなたは」

「あ、お前は沖繩の時の中学生」

「？」

後ろから来た背の高い男はまさかの顔見知りだったとき。真夜貴様、許さないからな

「改めまして、司波深雪です」

「兄の司波達也です」

「フォルティシーム・カラミティード」

まさかの場所で見知った顔を見たことで家に上がってお茶を、ご馳走になってしまった

「驚きました、まさか隣に越してきた方がお兄様とお知り合いだったとは」

「俺も驚いているよ。沖縄での出来事は今でも鮮明に覚えているからな」

「そこまでの事した覚えは無いんだがな」

なんか俺を見る司波兄の視線が鋭い気がするんだが。あともう一つ別の視線を感じる

「おい司波兄、その探る視線やめろ。俺の事視ても何も分からないだろ」

「……やっぱりバレてましたか」

「当たり前だろ」

やっぱり司波兄だったか。あの頃から変わってないな

「…お兄様」

「大丈夫だ深雪、心配するな……フォルティシームさん、あなたは一体何者ですか？」

「どういう意味だ？」

「あなたなら視て分かっているのですが、俺には精霊エリメンタルサイトの眼という特殊な眼があります。本来であればこの眼で視えないものはこの世に存在しないもののみ。だがあなたを視た瞬間精霊の眼が無効化された。教えて下さい、あなたは一体何者なんですか？」

そんな能力持ってたのか司波兄、そりゃいろんな人から迫害受けるわな

「……お前ら、『イリスの日記』って知ってるか？」

「一昔前に話題になった太古の昔の人が書いた日記ですよ。その日記帳の持ち主がイリスという名前だったことからそう名付けられた、と記憶してはいますが」

「そうだ、その日記の中に「数多の龍の力を宿し、いくつもの国を滅ぼした「生きる厄災」がいたって記述があったのは知ってるか？」

「そこも知っています。ですがそれはただの噂では……もしかして」

「それは噂なんかじゃない。その日記に書いてある「生きる厄災」こそ、不老不死と数多の龍の力を得たこの俺、フォルティシーム・カラミティーだ」

「……………」

絶句してるな。無理もない、目の前にいる奴が不老不死で龍の力持って国いくつも滅ぼしたなんて聞いて黙らない方がおかしい

「じゃあ俺の眼が効かないのは」

「精神に干渉してくる系の魔法はオートで無効化される」

「……それも龍の力ですか？」

「いや、これは俺独自の魔法だ。不老不死でも暇だけはどうにもなんなくてな、ひたすら魔法と武術、武器術や銃の扱いみたいな戦いに関する事は一通り極めた」

「極めたって……」

「何年ぐらい生きていますか？」

「10000年超えた辺りから数えてないから分からないが、大体20000年ぐらいじゃないか？」

「20000年も……」

一通り俺の正体を明かしたところで、出されたお茶に手を付けて一息

「逆にこっちが質問なんだけども、今の時代の魔法を使うお前から見て俺の魔法ってどう？」

「異質ですね」

「超能力の部類に入るかと」

やっぱりか、時代が進むに連れて魔法も変わったがここまで変わると面倒だな

「俺来年から学校に通う事になるんだけどさ、うまくやっていけると思うか？」

「普通の高校なら大丈夫だと思えますが、魔法科高校となると厳しいかもですね」

魔法科高校？そんな名前の高校があるのか

「魔法科高校ってなんだ？」

「魔法を学ぶ為の学校で、国が運営するものです。現代では魔法を使う学生のほとんどが行く高校です。おそらくフォルティスムさん「フォルトでいいよ」、フォルトさんも魔法科高校に行くかと」

「もしその高校で俺が魔法使ったら」

「確実に探られますね。それもかなりしつこく」

ええ〜それはそれで面倒くさそうだけど

「まあどうにかなるか」

「楽観的ですね」

「俺の行動原理は面白そうかどうか、学校に行くのだから面白そうだからだし。それに、俺の魔法みた奴らの面白い顔が見れるならそれでいいし」

「俺達まで巻き込まないで下さいね」

「それは分からないな」

これから楽しくなりそうだな、爺さんには感謝しないと

「そろそろお昼の時間ですし、フォルトさんも一緒にどうですか？」

「マジで!?! いや、引つ越したばかりで冷蔵庫の中何もないからどうしようかと思つてたんだよ」

「お兄様もよろしいですか？」

「ああ構わないよ」

「それでは準備をしてるので少々お待ち下さい」

昼飯までご馳走になってしまい流石に何かお返しをと言つた俺に達也が手合わせを申し込んできたので、司波家にある地下室でやったが結果は勿論俺の勝利。その光景を見ていた深雪から今度は魔法での勝負を挑まれたのでやったがこつちも勝利。深雪はちよつと泣いていた。俺は悪くないはずだ、だから達也、殺意MAXの攻撃やめろ

ちなみに司波家の地下にも通路があつて、聞いてみるとどうやら家と司波家を繋ぐ通路らしい。どうしてそんなもの作つたのか疑問だが、今の所は不都合は無いのでそのままにしよう。何かあつたら埋めるけど

ピツカピツカの！一年生！（大声）

春、それは出会いと別れの季節。桜舞い散る中、八王子にある国立魔法大学付属第一高校でも入学式が行われる

「納得いきませんー！」

「まだ言ってるのか……」

「ふあああ……」

このハレの日の学校に、叫ぶ女子生徒とそれを宥める男子生徒、その傍で眠そうに欠伸を噛み締めている男子生徒がいた

「どうしてお二人が補欠なのですか！お兄様はペーパーテストで、フォルトさんは実技でトップの成績ではありませんか！」

「魔法科高校なんだから、ペーパーテストより実技が重視されるのは当たり前だろう」

「どうやら女子生徒のほうは男子生徒二人の試験結果がどうにも納得出来ないものだった為、その理由を聞いているようだ」

「ではフォルトさんは何故！」

「ペーパーテストで寝てた」

まさかの解答。そう、この生きる厄災は入試の時の実技試験では精密なサイオン操作で一位の結果を叩き出したのだが、筆記試験の時は一問目から解らなくなり早々に寝たのだ。最高点と最低点を取った結果、真ん中より下の総合順位になったのだ

「まあ良いじゃん、結果受かったんだし」

「そうだな、俺としてはあの実技の結果でよく受かったもんだと思ってるよ」

「お二人共そんな覇気の無い事でどうしますか!」

またしても彼女の地雷を踏んでしまった二人、人の心が分からない二人である

「魔法も体術も、お二人に敵う相手などいません!お兄様に至っては勉強も敵う人はいません!そんなお二人がどうして補欠なんか!」

「まあまあ落ち着けて深雪。ここでそんな事言っても意味ないんだしさ」

「フォルトの言う通りだ。それに、俺は楽しみなんだ、この目で妹の晴れ舞台を見れるのがな」

「お兄様……」

見つめ合う達也と深雪、完全に蚊帳の外になったフォルトはわざとらしく咳払いをして二人を現実世界に戻す

「ゴホンッ!……お二人さん、そこまでにしないか?周りの目がある中でその行為は俺でもどうかと思うが」

「……はっ！すみませんフォルトさん」

「悪い……」

「いいって、それより深雪、そろそろリハの時間じゃないか？」

そう言つて時計を指差すと入学式のリハーサル時間が近づいている事に気が付いた「分かりました、では行つてきます。お二人共しつかり見ていて下さいね」

「ああ任せろ」

「寝てたらごめんね〜」

「そこは寝ないで下さいよ！」

フォルトの最後の一言で若干怒りながらも笑つて会場に向かった

「さて達也、残された俺達はやる事が無いんだが」

「……とりあえず、座れる場所探すか」

二人は座る場所を探して敷地内を散策する事にした

中庭でベンチを見つけた二人はそこに揃つて腰を降ろし達也は読書、フォルトはイヤホンをして端末のソシャゲで時間を潰していた

ふと時計に目を向けると、入場時間になつていた事に気付いた達也は、読書を中断し

フォルトに声をかける

「フォルト、そろそろ行くぞ」

「ちよつと待て、今いいところだから」

「はあ…先に行つてるぞ」

「おう」

フォルトがやっているソシャゲは多岐にわたる。RPG、パズルゲーム、アクションゲーム、リズムゲームなど。イヤホンをしている事から今回はリズムゲームだと考えた達也は先に行く事を選択。それを生返事で返したフォルトは集中して画面を見ている
「(なんか自由過ぎる弟が出来た気分だ)」

そんな事を思いながら、達也は入学式の会場である講堂へ向かった

「よつしやー!フルコンボー!」

「あの?入学式始まりますよ?」

「……ん?あんた誰だ?」

ゲームを終えた彼の目の前には自分よりも明らかに背の小さい女性が立っていた

「あんた……小さいな」

「なっ?!初対面の相手に対して失礼ですよ!あなたは新入生、私は三年生!目上の人に対してそれは無いでしょう!」

凶星を食らったのか顔を真っ赤にして激昂する女性、だが彼の目線からは怒っている中学生にしか見えなかった

「とにかく！もう入学式が始まります！早く移動するように！」

「はいはい分かったよ」

ベンチから立ち上がり講堂に向かおうとして後ろを向いて止まった

「そういや、まだあんたの名前聞いてなかったな」

「私は七草真由美！ここ第一高校の生徒会長です！」

「俺はフォルティーム・カミーラだ。よろしくな小さな生徒会長さん」

目的を終えて再び歩き出した彼の後ろ姿を七草真由美はじつと見つめていた

「彼が…フォルティーム・カミーラ…あの最強の滅龍魔法の使い手」

何故彼女がフォルティーム・カラミティーの彼を知っているのかは彼女自身しか知らない。大体は九島烈が原因なのだが

講堂に着いたフォルトは達也を見つけ右隣に座った。左側には既に先客がいたからだ。そこでもまた一悶着が

「あー！あんたはあの時の！」

「……おい達也、この赤髪誰だ?知り合いか?」

「彼女はさつき知り合ったんだ、名前は千葉エリカその隣は柴田美月という」

「よ、よろしくお願ひします」

「フォルティーム・カミーラだ、よろしくな」

眼鏡を付けた方、柴田美月とは軽く挨拶を交わしたが千葉エリカの方はまだ警戒しているようだつた

「ちよつとアンタ!私のこと覚えてないの!?!」

「知らんな」

「去年の夏頃、突然道場に来て勝負してボコボコにした相手を覚えてないですつて!?!」

「去年の夏頃………ああ思い出した、あの時の小娘か。俺に秒殺されて泣いてた」

「くくく!!ここぞで言わなくてもいいじゃない!」

今にも飛び掛かりそうなほど怒っているエリカに対して、小娘なんぞ眼中にないと言わんばかりの態度をとるフォルト

「エ、エリカちゃん落ち着いて!そろそろ式始まるよ!」

「フォルトもだ、無意識だろうが煽る様な事するのはよせ」

「……後で覚えてなさいよ」

「だから思い出したじゃん」

「そういう事じゃなくて!!」

言い合いも式が始まった事で中断、エリカは何度かフォルトの方を見ているが当の本人は寝てるか寝てないかの微妙な顔をしている。だが深雪の答辞になつたらすぐに覚醒して話を聞いている

そのまま恙無く入学式は終了し、生徒たちはIDカードを受け取る為に窓口へ向かった

「ねえねえ司波君は何組だった?」

「E組だ」

「私もE組です!」

「俺もだ」

達也と美月が同じ組なのは嬉しいが、そこにフォルトも入ってくるとあからさまに嫌な顔をした

「え〜アンタも一緒なの〜?」

「さつきからなんなんだお前、言いたいことあるならはつきり言えよ」

「なら遠慮なく……もう一度アタシと戦いなさい!あの時みたいに剣すら使つて貰えずに舐められたままなんて嫌なのよ!」

「お前そんな事でウジウジしてたのかよ、ちつせえ女だな」

「うるさいわよ!どうするの!?!受けるの!?!受けないの!?!」

「……やってやるよ、もう一回泣かせてやる」

「やれるもんならやってみなさいよ!」

何故か窓口でバチバチに目線合わせているが、衆目の目があるのを忘れているようだ
「二人ともそこままでにしないと、周りから白い目で見られてるよ」

「うっ!?!」

美月の注意でやつと周りを見た二人は、今までのやり取りを思い出してバツが悪そうな顔をした。自業自得である

「そ、そういえばさ、私達もホームルーム覗いてかない?」

「良いですね。司波君とフォルティーム君もどうですか?」

「悪い、妹と待ち合わせしてるんだ」

達也の妹発言に、これは面白そうだと表情を浮かばせるエリカ

「へえ、司波君の妹か、さぞかし可愛い妹さんなんだろうな」

「もしかして、妹さんって新入生総代の司波深雪さんですか?」

「そうなの!?!じゃあ双子ってこと?」

「昔からよく言われるんだが、双子じゃないんだ。俺が4月生まれで妹が3月生まれだからだよ」

昔からよく聞かれていた質問にも嫌な顔をせずには答える達也

「それにしても、よく分かったね。これまで周りから似てるなんて言われたこと無いんだけど」

「ええ、雰囲気似ているというか、お二人のオーラが凜としている感じだったので、もしかしたらそうなのかなと」

「……本当に、目がいいんだね」

柴田美月の眼鏡は自身の霊子放射光過敏症を防ぐものである。俗に『見え過ぎ病』とも称されるこの症状は、フシオン霊子の活動で生じる非物理的な光に対して過剰に反応してしまい、精神の均衡に異常をきたすものだ。彼女はそれを抑える眼鏡を掛けているが、それでも抑え切るには至ってないらしい

「お待たせしましたお兄様！ フォルトさん！」

達也はここで「遅かったな」と言おうとしたが、深雪の後ろにゾロゾロと人が連なっているのを見てその言葉を飲み込んだ

「おう深雪、遅かったな」

「すみません、なかなか皆さんが離してくれなくて……」

「そういう時はちゃんと自己主張しないと、なあなあで流されたらいずれ面倒事に巻き込まれるぞ」

「気を付けます……」

「ここでもはつきりと物を言うフォルトは、達也からしたら深雪を叱ってくれる数少ない人物だ。妹に対して暗にお前が悪いなんて言われたら怒りが沸き起るのだが、これは愛のある注意だと理解していた」

「また会いましたね、フォルティーム・カミーラ君」

「あ、小さな生徒会長」

「小さくないです!」

「でも自分では分かっているんだろ?」

「人に言われるのと自分で言うのは違うのよ!」

フォルトの口からでた生徒会長という言葉に驚きを見せた達也は、フォルトに聞いてみた

「おいフォルト、お前いつのまに生徒会長と知り合ったんだ?」

「中庭のベンチで。お前が行った後になんか目の前にいた」

達也は心底先に行つて良かったと思つた。話し掛ける前の彼女の顔は当たり障りのない穏やかな笑みだった。この手の人物は絡みだしたら相手を弄り倒してくるタイプの人だと察していた

「ゴホンッ!……初めまして、私はこの学校の生徒会長の七草真由美です。「七草」と書

いて「さえぐさ」と読みます

「……深雪の兄の司波達也です」

「千葉エリカです」

「柴田美月です」

渋々自己紹介をした達也だが、それ以上に気にしていたのは真由美の後ろにいる男子生徒だ。肩には一科生のエンブレムがあり、さつきから達也とフォルトを見ている。というか明らかに敵対視しているように見える

その間も深雪には気になっている事があった

「お兄様、そちらの方達はどなたですか？」

それは達也の後ろにいたエリカと美月の二人であった。敬愛する兄が後ろに女子生徒侍らせているように見えた彼女は、嫉妬心全開で兄に聞いた

「二人とも俺のクラスメイトだよ。赤い髪の方が千葉エリカさん、眼鏡を掛けているのが柴田美月さんだ」

達也は別にやましいことは何も無いので正直に答えたが、深雪はイマイチ納得していなかった

「ねえ、なんか寒くない？」

「急に寒気が……」

周りの人たちも寒さを感じている様子だ。達也には原因は分かっている、事象干渉力が強い深雪は感情が昂ると無意識に魔法を起動してしまうのだ

「そうですか、クラスメイト、ですか……ではそのクラスメイトとデートをしていた理由をお聞かせ願えますか？」

「デートって……」

妹がどういう思考を経てそう思ったのかは分からないが、周りに多くの生徒がいる状況でデートの言葉はマズイと思い、誤解を解こうとした時

『パチン!』

微かな音と共に周りの冷気が無くなった。驚いている周りを気にせず、達也と深雪、そして一部始終を見ていた真由美は冷気を消した人物に視線を向ける

「深雪く、まだ制御が出来てないな。でも去年よりも制御は出来てたぞ」

「フォルトさん……すみません」

「まさか、指パッチンだけで司波さんの事象干渉を打ち消したの？」

冷気を止めた張本人はフォルト。指パッチンだけであの深雪の干渉力を上回ったのだから、周りが驚くのも無理はない。達也と深雪はもう何度も見ているので驚きはしなかった

「それとな深雪、達也が女性と自分からデートなんて出来ると思うか？」

「……それはそうですね」

なにか失礼な事を言われている気もしたが、誤解を解くいいチャンスだと思い達也も続ける

「フォルトの言う通りだ。彼女たちはお前を待つのに付き合つて貰つたんだ、あの言い方は彼女たちに失礼だろう」

「そうですね、申し訳ありません」

「い、いや、別にいいって」

「そうですね、気にしてませんから」

どうにか誤解が解けて一安心の達也。深雪はそのままエリカと美月と交流し名前呼びするまでになった。その間も周りの一科生は苛立ちと悔しが混じつたような顔をしている。真由美はずっと笑顔のままだが時折フォルトの方を見る仕草をしている

「深雪、生徒会の方達との話はもういいのか？まだならどこか適当な場所で時間を潰しているが」

「その必要はありませんよ」

深雪の学校での立場を悪くすると思つた達也は生徒会の話を振つたが、その提案を否定したのは真由美だった

「今日は挨拶だけで十分ですし、既に先約があるならそちらを優先して貰つて構いませ

んよ」

「しかし会長!こちらも重要な用件だったので!」

「予め約束していた訳ではありません。先約があるならそつちを優先するのは当然では?」

その真由美の解答にこれまた待ったを掛けたのはずっと真由美の後ろにいた生徒会副会長だが、真由美に正論をぶつけられて黙った。達也たちの方を睨みながら

「それでは深雪さん、また後日。フォルト君も今度ゆつくりお話ししましょうね」

「お前と話すことは何もないが」

「貴様!会長に対してなんて口を!」

「女の後ろに付いて来るだけの金魚のフンは黙つてろ」

「な、なんだと!」

真由美の馴れ馴れしい態度に今日最高の苛立ちを見せたフォルトは突っ掛かってきた男子生徒に軽く威圧を込めて睨みつける。男子生徒も怯みはしたがさらに食って掛かる

「後ろに侍らせてるのはお前の部下だろう、飼い主なら躡ぐらいしつかりしとけ。それとな、俺はお前にフォルトって呼び方を許した覚えはない。お前はカミーラと呼べ」

「ごめんなさいねカミーラ君、しつかり言い聞かせとくわ」

「次嘯み付いてきたら今度は容赦しないからな。達也、深雪、帰ろうぜ」

「そうだな。それでは失礼します」

「失礼します」

達也と深雪、それにエリカと美月も連れてフォルトは帰って行った。男子生徒に言った「容赦しない」は「どうなつても知らないからな」という意味で使っている事は達也も深雪も気付いている。今フォルトを敵視している男子生徒は今後もフォルトになにかと突つかかるだろう。この学校で死人が出ないことを、達也は帰りながら祈った

日本の未来は、君たち（十師族）に掛かっている！

「なんで俺まで……」

「すみませんフォルトさん、先生がどうしてもお会いしたいと言って聞かなくて」

「深雪が謝ることじゃない、これは先生が望んだことだ。どうなろうとあの人の自業自得だ」

入学式の次の日の早朝、達也と深雪はフォルトを叩き起こして玄関前に集まっていた「これはあれだな、その八雲とか言うクソ坊主をぶん殴っても仕方ないな」

「程々にな。お前の全力で人なんか殴ったら地形諸共吹き飛んでしまう」

「分かっているよ程々の力で何十発もブチ込むから」

早朝に起こされたストレスをこうなった元凶に向けて殺意を高めていく

達也の師匠でもある九重八雲は彼等の家から10km程離れた場所にある。寺とは言ったがそれは表の話、その寺の中には稽古場や地下には射撃訓練場などの実戦を想定した訓練場が存在している

寺に到着した三人は階段を登り境内前の門の前で立ち止まった

「フォルト、深雪を守ってくれ。どうやら今日は乱取りのようだ」

「へいよ」

「頑張つて下さいお兄様」

達也が一步を踏み出すと境内にいた僧侶というか修行僧が達也に襲いかかる。その数を物ともせず的確に捌いていく

「深雪、そのまま動くなよ」

「え？フォルトさん、何を」

達也が修行僧を捌いていく中、何かの気配を感じたフォルトは深雪の後ろに向けてかなり手加減した拳を繰り出す

「おっと」

繰り出されたフォルトの拳を両腕をクロスして受け止めた一人の坊主

「先生！気配を消して背後に立つのはやめて下さいとあれほど申しましたのに！」

「そう言われてもねえ、僕は忍びだから。気配を消すのは最早職業病みたいなものさ。そして」

深雪の背後に現れた坊主こそ九重八雲、今果心言われる忍術使いで達也の師匠だ

「君がフォルティシム・カラミティー君か。初めまして、私は九重八雲、この九重寺の

僧侶さ」

「お前が俺の睡眠を邪魔した坊主か」

「それについては謝罪するよ、どうしても君の力を見てみたくてね」

「御託はいいからさっさと殴らせろ」

殺る気満々のフォルトに対して終始ニコニコして表情を読み取らせない八雲、今にも戦いが始まりそうだがそこに達也が待ったをかける

「待てフォルト、先生を殴るのは俺の修行が終わってからだ」

「おや、もう彼等じゃ達也君の相手は無理か」

「……早く終わらせろよ、ゲームして待つてるからな」

若干不貞腐れたフォルトは賽銭箱の前の階段に座り、持ってきた端末でゲームを始めた

「ふむ、今日はこれまでにしようか」

「はい……ありがとう……ございました」

「ようやく俺の番か」

達也と八雲の組み手が終わったところでフォルトは端末を深雪に渡す。両者境内の真ん中辺りに立って開始の合図を待つ

「それじゃあ深雪君、審判よろしく」

「分かりました、では……始め！」

深雪の合図共に先に動いたのは八雲、フォルトの顔面を狙って右拳を放つ

「(決まった!)」

境内にいた誰もがそう思ったが、結果は違った

「ブフツ!?!」

フォルトの顔面に拳を打ち込んだはずの八雲が、逆に後ろに吹っ飛んでいった

「な!?! 師匠!」

「今何が起きたんだ……」

「全く見えなかった」

修行僧達も驚いているが、八雲本人が一番驚いていた

「僕の拳が当たる寸前に殴られたのか……」

「そうだ、これくらいなら躲してくると思っただが……案外大した事無いなお前」

八雲にとって大した事無いと言えるフォルトが規格外なだけだが、そう言われて八雲の顔は明らかに引き攣っている

「……自分で言うのもあれだけど、僕もかなりの実力者なんだけどなあ」

「俺の方がお前より強いってことだろ」

グサグサ八雲の自尊心を抉っていくフォルトだが彼にそんな気は一ミリもない。

思った事を正直に言っているだけなのだから

「はあく……僕もまだまだってことか」

「いえ師匠、この場合はフォルトのほうがおかしいんです」

「おい達也、おかしいはないだろ」

「ふふつ、三人とも朝食にしませんか？」

深雪の提案で四人楽しく朝食を食べた早朝だった

あれから三人それぞれの家に帰り準備をしてから、もう一度登校の準備をする。八雲に見せる為に深雪だけは制服を着ていたが、フォルトと達也は動きやすい服で行ったので着替える為に、達也はさらに汗もかいていたのでシャワーを浴びて。準備を終えた三人は一緒に登校する

「じゃあ俺達はこつちだから」

「また後でな」

「はい、また後で」

深雪と別れたフォルトと達也が1―Eの教室に入ると、既にエリカと美月がいた

「二人ともおはよー」

「おはようございます」

フレンドリーなエリカ、親しき中にも礼儀ありの美月、性格がよく表れていると言える

「おはよう二人とも」

「おーす」

挨拶を返す達也とフォルトは席に座り二人とも端末にIDを差し込む

「二人とも何やってんの？」

「ゲームしたいから「今のうちに受講登録しようと思って」」

片やゲーム時間の確保、片や効率的にするため、同じ行動でもまるつきり動機が違う

二人だった

「おースゲー！」

「ん？」

すると達也の前の席にいた男子生徒が、達也の高速キーボード捌きを見て声を上げる

「ああすまん、今どきキーボードオンリーの入力なんて珍しいもんでさ」

「慣れればこっちの方が速いぞ」

「へえー…ああ俺、西城レオンハルト、レオって呼んでくれ。得意な術式は硬化魔法だ」

「司波達也だ、俺も達也でいい。それとあっちの窓際の席でゲームしてるのが」

達也が視線を窓際の席に向けると、周りも同じ方向を向く

「フォルト टीम・カミーラだ。あいつは俺の家の隣に住んでいてな、昔からの知り合いだ」

「へえー、あいつがか」

視線の先には既に登録を済ませて端末でゲームをしているフォルトの姿が。またイヤホンをしているが、指はそこまで動いていない。何のゲームをしているか気にならないでもないが、ここでフォルトを呼んで気をそらしてなにか言われるのも面倒なので放置することにした

「今は忙しいみたいだから、話し掛けるなら後の方がいいだろう」

「だな」

その後先生が予鈴が鳴った事で生徒が全員席につく。フォルトも一応は端末を切っている。予鈴が鳴ってすぐに教室に女性の先生が入ってきた

「皆さん、入学おめでとうございます。カウンセラーの小野遥です。これから皆さんの端末にガイダンスを送りますので、その後履修登録を済ませて下さい。もう終わっている生徒がいるのなら退出しても構いませんが、ガイダンス開始後は退出出来ません。希望者は今のうちに退出して下さい」

そう先生が言うのと椅子から立つ音が二つ、フォルトともう一人の男子生徒だ。達也がフォルトに一瞬目線を合わせると、フォルトは右手の人差し指で上を指した。そのジェスチャーを理解したのか、達也は軽く頷いて了解の意を示す

ガイドダンスが終わると昼まで自由時間という事で、各々の生徒が行きたい場所に行く。それは達也たちも例外ではない

「達也、昼までどうするよ」

「特に決めてないが……何かあるか？」

「工房見学はどうだ？」

「工房か……ならフォルトにも連絡するからちよつと待つててくれ」

レオにちよつと待つてて貰い、端末でフォルトに連絡を取る

『なんだ達也』

「フォルト、今どこにいる」

『屋根の上だが』

「屋根の上？」

「は？ 屋根？」

「なんで屋根？」

まさかの屋根の上発言に頭を抱えながらも達也は本題を切り出す

「……まあいい、これからみんなで工房見学に行くんだがお前もどうだ？」

『あー…俺はいいや、ここでゲームしてるから。帰る時にもう一回連絡くれ。じゃ』

「あ、おい……切られた」

「あいつ何だつて？」

「遠慮するつて」

「理由は？」

「ゲームしたいからだそうだ」

屋根の上でなんて事をするんだと思った一同だが、レオ以外はフォルトの性格を知っている為、それ以上は何も言わなかった

「とりあえず行くか。工房なら早めに行かないとな」

「そうだな」

「私達も行こうよ」

「そうですね、ご一緒してもいいですか？」

「勿論だ」

四人は楽しく話しながら工房までの廊下を歩いていった

「この学校はなんか楽しくない……」

屋根上に寝そべりながらゲームをしていたフォルトだが、どうにもやる気が起きなくてすぐにやめてしまった

「……俺が思い描いていた学校と違う」

そう言つて持つていた端末で誰かに連絡をした

『もしもし?』

「ああ爺さん、俺だ」

『フォルティシームさん、何かありましたか』

フォルトが連絡した相手は九島烈、フォルトをこの高校に入れた張本人でもある

「あんたが入れてくれた第一高校なんだがな、楽しくないんだよ」

『……それは何故?』

「一科生と二科生つて別れてんじゃん、アレの所為で一科生は自尊心の塊の馬鹿ばっか、二科生は卑屈な考えの萎れた奴ばっか、例外はいるがな。何だこれは、お前俺を嵌めたのか?」

その声は明らかに怒りが滲み出ている。九島本人は騙すつもりなんて毛頭なかった、フォルトが二科生になったのは九島にとつて誤算以外の何ものでもない。サイオン量、魔法力、魔法を扱う精密さ、どれを取っても現代の人間が勝てる部分は一つも無い。た

だ九島は知らなかったのだ、フォルトが勉強が出来ない事を

『……結果的にそのような形になってしまった事には謝罪します。一高も変わってきているのです。今の生徒会長である七草真由美は一科生ですが、その差別をどうにか撤廃しようかと奮闘しています』

「あのちつちえ生徒会長がか」

『はい、彼女が生徒会長になってからの一高は変わりましたがまだまだ差別は残っています』

「……もしかしてお前、俺にその手伝いをさせる為にこの学校に入れたのか？」

『……その意味もありました』

「貴様、いよいよもっていい加減にしろよ？この俺を利用するなど、2000年は早いわ」

お前から貴様が変わった事で、より怒りが鮮明に表れた事で九島も狼狽える

『……申し訳ありません』

「今回は許すが、次は無いぞ。もし次俺を利用しようものなら貴様の家族親類共々九島の血がこの星に残らないように滅ぼすからな。他の十師族にも伝えておけ」

『分かりました……肝に銘じます』

九島の返事を最後に一方的に通話を切ったフォルト。彼の嫌いな事は利用される事、

見下される事。九島はそのうちの一つに触れたのだ。今後有り得るのは十師族に最も当てはまるだろう。彼等は日本政府の権力をも上回る力を持つている。その矛先がフォルトに向いた時、それは日本に未曾有の危機が訪れるという事になる

「はぁー……腹減った」

フォルトは食堂に向かう為に屋根から降りるのだった

嘸ませはやっぱり嘸ませで不憫

昼食を食べる為に食堂に来たフォルトだが、そこで意外な光景を見た

「へえ、あの深雪が達也以外の男と飯食うなんてな」

だが深雪は困っている様な顔をしていた。そこからフォルトは推測する

「……だから自己主張しろって言ったのに」

フォルトは深雪が自分からすすんで一緒にいる訳では無いと察した。ならばここで自分が深雪の近くに行っても余計な争いの種を蒔くだけだと敢えて深雪から離れた場所ですることにした

「(フォルトさん……)」

離れていくフォルトの姿を目で追う深雪、彼が忠告してくれたのにこの有様。全くもって不甲斐ない

「司波さん？どうかしました？」

「あ、いえ、なんでもありません」

一緒にいた生徒の一人が声を掛けてきたが、ここでフォルトの事を言う訳にもいかず深雪は食事を続けた

その日の放課後の校門前には達也たちのグループと深雪、そんな彼等の前には一科生の少数の集団が

「いい加減にして下さい！深雪さんはお兄さんと帰ると言ってるじゃないですか！」

初めに声を荒らげたのは美月だった。

「あなた達は何の権利があつて二人の中を引き裂こうというんですか！」

「そんな…美月だったら…何、何を勘違いしてるのかしら」

顔を真っ赤にしている深雪に、この状況で勘違いしているのはお前だなんてツツコミを出来る人はいなかった

「…お兄様、先程から誰に連絡しているのですか？」

「フォルトにな、一応鞆は持っているんだが」

「そう言えませんがね。いつもなら先に帰るとか言つてそうですが」

「まあ大体予想はつくがな。それより今はこの状況をどうにかするのが先決か」

そう言つて達也は端末を仕舞い、一科生たちに向き直る。友達がそんな状況にも関わらずフォルトはどこで何をしているのかと言うと

「ZZZZ……」

またしても屋根上で寝ていた。この世界最強、昼食の後の午後の授業時間もずつと屋根上でゲームをしていたのだ。やるとこまでやったら寝て、また起きてやって、また寝る、なんて完全にダメ人間の生活を屋根の上で送っていた。端末に達也からの着信が何回もあったが、今だに起きてない。余程早朝の起床が堪えたのだろうか

「……………んんんんん！ふあああ……………今何時だ？」

ようやく起きたフォルトは端末で時間を確認

「もうこんな時間か……………やべッ、達也からスゲー着信来てる」

達也からの通知の数に若干焦ったフォルトは達也に電話をかける

「……………ああ達也？ゴメンな電話出れなくて、今まで寝ててよく」

『だと思った。お前どうせ屋根の上だろ、そこから校門が見えるか』

「見えるけど」

『そこに向かい合ってる集団がいるのは分かるか？』

「それも分かるけど」

『ならそこから飛んで校門に近い方の集団に着地しろ。そこに俺と深雪がいる』

「りよ〜かい。あ、達也、俺の鞆は？」

『持ってる』

「さすが、じゃ、すぐ行く」

電話を切って立ち上がり軽く体を伸ばす

「行きますか」

グツと沈み込み、思い切り飛び上がる

「せー…の!」

フォルトが飛び上がったのを確認した達也は周りに下がるように言う

「美月、エリカ、レオ、そこから離れた方がいい」

「司波君?何かあるんですか?」

「あるというか、これから降ってくるから」

「[[[??:?]]」

名前が挙がった三人はよく分かってないが、達也に言われた通り数歩下がった。その数秒後

ドオオオオオオン!!!

屋根が割れるんじゃないかと思うほどの力で飛び上がったフォルトが二つの集団の真ん中辺りに着地した

「よ、俺の鞆悪いな達也」

「お前がこうなることは分かってたからな」

「さすが俺の友達だ」

フォルトが現れた事は達也と深雪には驚くような事では無いが、周りは違うようだ

「ちよつとアンタ！ 一体どっから来たのよ！ 危ないじゃない！」

「当たってないんだからいいだろうが」

「そういう問題じゃない！」

キレルエリカ

「あの、フォルトさん、一体何処から来たんですか？」

「あの屋根の上から飛んできた」

「……そうですか」

聞くのを諦めた美月

「……なあ達也、あいつが言つてたフォルティーム・カミーラか？」

「そうだ」

「……なんか、あれだな、色んな意味でヤバそうだな」

達也の友達にこんな奴がいたのかと驚いているレオ

「よししよつと……さ、帰ろうぜ」

「……はっ！ ちよつと待て！」

「ん？ 誰だお前」

帰ろうとしたフォルトを一科生の一人が呼び止めた

「司波さんは僕達と帰るんだ！その方が司波さんの為でもある！」

「は？何言ってるんだお前、深雪がそんな事言ったのか？」

深雪の方を見るフォルト

「いえ…私はお兄様たちと帰ろうと」

「…なるほど、昼みたいに流されたのか」

「…申し訳ありません」

シユンと肩を落としてしまった深雪は達也が慰めるとして、フォルトは一科生の方を向く

「深雪は兄と帰りたいと言ったが？」

「彼女はお前たち二科生ウイードと一緒にいて良い人じゃないんだ！」

「同じ新入生なのに…今の時点でブルームであるあなた達の何が優れてるんですか！」

我慢できなかった美月の怒りの籠もった言葉を聞いて一科生の一人が不敵な笑みを浮かべる

「どこが優れているか、知りたいか？」

「へっ、是非ともお教え願おうじゃねえか」

レオが挑発に乗り臨戦態勢をとる

「いいだろう教えてやる」

一科生の体からサイオンが出て魔法発動の準備をする

「これがお前らとの才能の差だ！」

腰の拳銃型CADをレオに向けて魔法を発動しようとした時

「沈め」

瞬間的に一科生の目の前に移動したフォルトが頭を片手で鷲掴みして地面に叩きつけた

「があ!!」

「森崎!」

叩きつけられた生徒は白目を剥いて動かなくなり、地面はヒビ割れた

「お兄様、フォルトさんもしかして」

「ああ、我慢の限界らしい」

フォルトはゆらりと立ち上がり、後ろにいた生徒たちを見る

「……さつきから黙って見てりやナメた真似しやがって、もう我慢出来ねえぞ。お前ら覚悟は出来てんだろうな」

「……あれは駄目だな」

「完全に怒ってますね」

フォルトのキレように完全にビビっている一科生たち、本能的に魔法を発動しようとしてCADに手をかけようにも震えて上手く操作出来ない。そんな事はお構いなしに一步一步近づいて行くフォルト

「達也、使つていいか？お前と深雪にも迷惑がかかると思うが」

「……出来るだけヤバイやつは使わないようにな」

「分かった……モード・金剛龍」

フォルトの周りに金色のオーラが全員に目視出来るほど現れた

「クソオ！」

恐怖心にかけて魔法を発動する一科生たち、一直線にフォルトに向かっていく魔法

「やめなさい！自衛目的以外での魔法の使用は犯罪よ！」

「フォルトさん！」

出てきた真由美と美月の声も虚しく魔法は全弾直撃

「お前からー！！」

「待てレオ」

「でも達也！」

「いいから待ってろ」

砂煙が晴れた先にいたのは、無傷のフォルトだった

「……うそ」

「な?! 無傷だと!」

「あれだけの魔法を食らったのに!」

制服に付いた砂を叩きながら平然としているフォルト

「どうだ? お前らがいくら束になろうと俺に傷一つ付けられないって事がそんなに悔しいか?」

煽るフォルトだが、それに答えられる精神状態の者はいなかった

「あれだけ言っただのにこんなもんか……じゃあ今度はこつちから「待て!」……あ?」
「風紀委員の渡辺摩利だ! 君たち1—Aと1—Eの生徒だな、事情を聞く、ついて来てもらおう」

真由美の後に出てきた摩利が風紀委員の名前を出して争いを止めた

「貴様ら、今更出てきて何言っつて「すいません、悪ふざけが過ぎました」おい達也!」
「悪ふざけだど?」

「彼に向けて魔法を撃った彼等は言い逃れ出来ませんが、そこで寝ている森崎にはクイック・ドロウを見せて貰ってました」

「ほう」

達也の言葉を疑いの表情で聞く女子生徒

「そのの女子生徒は彼に攻撃しようとしてなかったか？」

「彼女が使おうとしたのは閃光魔法です。威力も抑えていたので失明の恐れはありませんでした」

「……君は起動式を読み取る事が出来るのか」

「実技は苦手ですが分析は得意です」

「ごまかすのも得意なようだな、そして……」

達也に向けていた視線をフォルトに移す

「久しぶりだな、フォルト」

「誰だお前」

「やっぱり覚えてないか」

エリカと同じようなことを言った摩利もフォルトには覚えられてなかった

「千葉家の道場でお前と対戦したんだが」

「えくあくうく……ああ男の横にいた奴か」

「……まあ思い出したならいい、怪我は無いか？」

「見ての通り無傷だが？お前らが邪魔した所為で殺しそびれたがな」

「相変わらず物騒だな、今日の所は帰れ。後は私達がやとく」

「当然だろ、てか来るのおせーよ」

「真由美がもうちよつと見てましようなんて言うからな」

摩利の言葉を受けてギロリと真由美の方を睨むフォルト、冷や汗をダラダラにして目を逸らす真由美

「……次はねえぞ幼児」

「ちよ！幼児つて「分かったか？」……はい」

「真由美もフォルトの威圧には敵わないか」

「これまでの重苦しい雰囲気は消え、フォルトに攻撃した一科生以外は帰路に着いた

「あ、あの！」

「ん？」

帰ろうとした達也の前にさっきの女子生徒が立った

「いえ、その……さっきはありがとうございました！」

「……本当の事を言ったただだから」

「それでもです！私光井ほのかって言います！改めてさっきは助けてくれてありがとうございました」

まさかの謝罪からのお礼に固まる達也

「お兄さんが庇ってくれたから大事にならなかつたので」

「どういたしまして。でもお兄さん呼びはやめてくれ、達也でいい。それで……」

「雫、北山雫です。私からも、ほのかを助けてくれてありがとうございますございました」
「それで、その……駅までご一緒してもいいですか？」

達也と深雪はほのかに首を縦に振って頷いて見せた後、フォルトの方を見る

「お前はどうか？」

「いいんじゃない？」

「……じゃあ行くかうか」

「はい！」

ほのかと雫を含めた一行は駅の途中にあるカフェに寄って話していた。内容は達也がエリカの持ってた警棒をCADだと見抜いたことや深雪のCADの調整を達也がやっている事など。だが一番の話題はやはりフォルトの話だろうか

「あの、フォルトさんがあの時魔法を受けても無傷だったのは何か魔法を使ったんですか」

「ん？まあそんな感じだ。自分の体を超固くして耐えたんだ」

「硬化魔法って事ですか？」

「そんなところだ」

あの一件で気になっていた事をほのかはフォルトに聞いてみた。あの魔法を無傷で耐えるなんて何かあるに違いないと踏んだが、返ってきた答えは硬化魔法を使っただけ

という。屋根から飛んできた事言い何かと人間離れしているなど思った一同

「もしかして、魔法科高校って一般人のほうが少ないんじゃない？」

「魔法科高校に一般人はいないと思う」

「「「「「……………」」」」」

雫の正論ツツコミに黙ってしまった一同。こうして授業初日は終わった

「…………鍵が開いてる」

自宅に帰ってきたフォルトがドアを引くと鍵が開いている事に気付いた。朝行くときは確かに閉めたはず、フォルトは警戒しながら中に入る

「あら、お帰りなさい」

「お帰りなさい」

「……………は？」

リビングに入ったフォルトの目に飛び込んできたのは、椅子に座ってお茶を飲みながらテレビを見ている女性にキッチンに立って夕飯の準備をしている女性。さらに二人とも見たことある顔だった

「……………何してんだ？あんたら」

「お茶を飲んでるの」

「晩御飯を作っています」

そうだけどうじゃねえよと言いたかったが、面倒くさくなるのが見えていたのでその言葉は発さなかった。その代わりに端末で達也に連絡をとる

「……おい達也、何故か俺の家にお前の関係者がいるんだが。具体的にはお前の母親とその付き人が」

『……すまん、もう一回言ってくれ』

「だから、俺の家にお前の母親とその付き人がいるんだよ」

『本当にすまない、すぐに行く』

電話してから秒で家に行って来た達也、深雪も一緒に来ている

「お母様！穂波さん！」

「……何やってるんですか、母さん、穂波さん」

「あら達也、深雪、お帰り」

「お帰りじゃなくて……本家の方はいいんですか？」

「経過観察も終わって退院したから、まずは恩人に挨拶をと思つてね」

「だからって勝手に上がつてんじゃねえよ」

フォルトの最もな意見を笑つて誤魔化す達也の母

「改めてフォルティシーム・カラミティーさん、穂波さんの事も、私の体の事も、重ね重ねねありがとうございますございました。達也と深雪の母の司波深夜です」

「深夜様のガーディアン桜井穂波です。沖縄では助かりました」

「……フォルティシーム・カラミティーだ」

まさかの再会になってしまって面食らっているフォルトだが、構わず深夜は続ける

「そうだ達也、深雪、私達これからはあなた達の家で生活するから」

「はい？」

「よろしくお願いします」

丁寧に頭を下げる穂波に対してテレビから目を離さずに言う深夜

「……達也、何かあったら俺の家来い。匿ってやるから」

「世話になる……」

自宅に男1、女3の空間なんて居づらい事この上ないと、フォルトなりに達也を気遣った。達也のプライベートは無くなったも同然だ

次回！服部死す！

一科と二科でちよつと小競り合いがあつた次の日、いつも通り三人で登校していた彼等

「達也、大丈夫か？なんかいつもより元氣無いが」

「お兄様！もしかして風邪を引かれてしまわれたのですか!?なら今夜は深雪が温めて差し上げますね！」

「……いや原因お前じゃん」

公然と道のど真ん中で実の兄に添い寝宣言をする実妹に周りも勿論引いているが、一番引いているのは近くにいたフォルトだった

「……深雪の気持ちは嬉しいが、もし風邪だつたらお前に移してしまう。今夜は早めに寝るよ」

「そうですか……チツ」

いや何がつかりしてるんだよ、なにするつもりだつたんだよ、てか舌打ちしたの聞こえてるからな、とは言えず心の中で思うだけに留めたフォルトは賢明だつたと言えよう
「フォールトトトトトト」

「フォルト、呼ばれてるぞ」

「俺にあんなヤバい笑顔で駆け寄ってくる知り合いはいない」

後方見ずとも誰が来たのかは分かった

「た〜つ〜や〜く〜ん」

「良かったな達也、お前も認知されてるぞ」

「変な言い方するな」

あの小悪魔はフォルトだけでなく達也にも照準を合わせたらしい、胃痛の種が増えた達也だった

「おはようフォルト君、達也君、深雪さんもおはよう」

「……………」

「……………おはようございます、会長」

「おはようございます」

真由美の朝の挨拶に、黙るフォルト、一応返す達也、礼儀正しく頭を下げる深雪、三者三様の対応を見せた

「フォルト君?おはよう」

「……………よす」

「最初の間と言い方が気にならないでもないけどまあ良いでしょう」

「会長、こんな朝から何か用ですか？」

「あ、そうそう、深雪さんとお話ししたいことがあるんだけど、今日のお昼はどうするか決めてる？」

真由美の質問に達也と深雪は互いの顔を見たが、ここで断るのも深雪の立場を悪くすると思い、達也が答える

「いえ、特にありませんが」

「そう、なら一緒に生徒会室で食べない？勿論、三人一緒に」

「……分かりました、昼食の時間になったら伺います」

「良かった、ではまたお昼にね」

「はい」

要件を伝え終えた真由美は三人を通り過ぎて一足先に学校へ向かった

「……お兄様、良かったのですか？」

「あそこで断つたらお前の生徒会での立場が悪くなると思ってね」

「いえ、そうではなくて、フォルトさん、また屋根の上に行くのでは」

深雪は自分の事を考えてくれたのは勿論嬉しいのだが、それよりも気掛かりだったのは、フォルトがまた屋根上に行つて逃れようとする事だった。フォルト自身もさつきから二人と目を合わせようとしていない

「心配ない、レオ達に言つて昼休みになった瞬間周りを囲んでもらうから」

「それなら安心ですね」

「達也 テメエ!」

「俺だけで行くか、俺が行くならお前も道連れだ」

まさかの友の裏切りに睨みを利かせるフォルトだが、達也はそれに見向きもせず深雪を連れて通学路を歩いて行く。観念したフォルトもその後ろに付いて行つた

昼休みに囲まれるなら初めから逃げればいいじゃんと思つたフォルトだが、それすらも予想していた達也一派によつて取り押さえられ席に座らされた。結局逃げられずに昼休みを迎えてしまった

「1-E 司波達也、フォルトチーム・カミィラ、1-A 司波深雪です」

「どうぞ」

入室の許可を得て中に入ると、長机の一番奥に真由美、右側に女子生徒が三人座つていた

「いらつしやい、遠慮せず入つて」

「失礼します」

深雪が四葉仕込みの上品で丁寧なお辞儀で礼を表す

「はあああ……」

オレンジ髪の生徒が深雪のお辞儀の綺麗さに声を上げる。真由美を含めた他の生徒も驚いているようだ

「お前らさつさと座れよ」

「……お前は」

丁寧にお辞儀した深雪とその隣にいた達也を置いてすぐに座ったフォルトに呆れる摩利

みんなが座ったところで真由美から話題を切り出す

「深雪さんは知っているとと思うけど、達也君とフォルト君がいるからもう一度紹介するわ。私の隣にいるのが、会計の市原鈴音。通称リンちゃん」

「私の事をそう呼ぶのは会長だけです」

紺色の長髪にクールな表情の生徒が答える

「リンちゃんか……」

「……もう一人増えましたね」

楽しそうな事なら何でも乗ってくるフォルトは呼んだ

「その隣は知ってますね、風紀委員長長の渡辺摩利」

「改めてよろしく」

「さらにその隣が書記の中条あずさ。通所あーちゃん」

「会長!下級生がいる前でそれはやめて下さい!」

「あーちゃん……フツ」

「ほらあ!」

「……でも乗ってくるフォルト、いい弄り相手を見つけたようだ。とても悪い顔をして
いる

「以上が今期の生徒会メンバーです」

「私は違うがな」

「知ってる」

「……お前は相変わらず私に厳しいな」

「気のせいじゃね?」

「……そういう事にしておこう」

フォルトの素っ気ない態度は昔からだったようで、摩利も諦めた

自己紹介が済んでからは摩利が意外と乙女で自分で弁当を作っていることがバレて顔を赤くして照れたり、達也と深雪の仲が良すぎてあずさが顔を赤くしたり、その仲の良さから達也が深雪を血が繋がってなければ彼女にしたいなんて冗談を言って深雪が

割と本気で凹んだり、その間フォルトはずっとゲームをしていた。各自が昼食を食べ終えた頃、真由美が今回彼等と呼んだ本題を話す

「当校の生徒会長は選挙で選ばれますが、それ以外の役員は私生徒会長に解任と選任の権利が与えられています」

「深雪を生徒会に入れたらいいって事か」

「ここまでの話で、フォルトは真由美が言いたい事を的確に理解した

「話が早くて助かるわカミーラ君。例年、新入生総代を務めた一年生はなつて貰っている。我々生徒会は深雪さん、あなたが生徒会に入ってくれる事を希望します」

真由美の勧誘に深雪は一度達也のほうを見る。達也がそれに頷いて答えると、深雪もまた頷いた

「会長は、兄の成績をご存知ですか？」

「おっと？」

まさかの深雪の言葉に声を出してしまったフォルト。誰もお願いしませんがと言うと思つてたところに妹による兄の推薦が始まつてしまった。ちなみに深雪がフォルトの名前を出さなかつたのは、単に筆記試験がボロボロだったからだ

「優秀な人材を生徒会に入れるのなら、私よりも兄のほうが適任だと思います。生徒会に入る話は光栄ですが」

「それは出来ません」

深雪の主張に、間髪入れずに鈴音からの明確な否定が入る

「二科生から生徒会役員は出せない、これは感情ではなく当校の規則です。この規則がある以上、深雪さんのお兄さんを生徒会に入れることは出来ません」

感情ではなく規則、明確なルールがある以上この話は深雪が折れるしかない

「……申し訳ありませんでした」

「いえ、全て学校側に非がありますから。こちらこそすいません」

若干悪い空気になったものの、鈴音の学校が悪い発言で幾分か空気が軽くなったところで真由美がまとめに入る

「それじゃあ深雪さんは今期の生徒会に書記として入ってくださいですか?」

「……………」

「やってやれよ深雪」

「フォルトさん……………」

「ここでやるって言おうが言うまいが達也は生徒会に入れない、結果は変わらないんだよ。だったら自分に利益がある方を選び、達也とお前じゃなくお前のみに利益がある方をな」

まだ迷っていた深雪にフォルトの一押し、深雪はもう一度達也のほうを見てから真由

美を見る

「分かりました。精一杯務めさせて頂きます」

「よろしくね、詳しいことはあーちゃんから聞いてね」

「よろしくお願いします、中条先輩」

「先輩……任せて下さい司波さん！すっかりお教えします！」

後輩から先輩呼びされた事が余程嬉しかったのか気合の入った返事で返すあずさ

「ちよつといいか？」

あずさが悦に浸つてるところで摩利が手を上げる

「風紀委員の生徒会選任枠の内前年度卒業生の二枠がまだ埋まってないんだ」

「摩利、それは今選任中じゃ」

「生徒会選任枠は二科生から選んでもいい……だったよな」

そう言つて達也とフォルトのほうを見る摩利

「ナイスよ摩利！風紀委員なら二科生でも問題ない！生徒会は達也君とカミーラ君を風

紀委員に推薦します！」

「はあ?!ふざけんな！」

「ちよつと待つて下さい！」

突然の指名に声を荒げるフォルトと達也

「何で俺が風紀委員なんて面倒なものやらなきやなんねえんだ!俺はやらねーぞ!」

「そうです。俺達の意思はどうなるんですか。大体、風紀委員が何をするのか具体的な説明も受けてないんですよ」

「妹さんにも、生徒会が何をするのか具体的な説明はしてませんが」

鈴音の発言に口を止める達也だが、フォルトは止まらない

「そういう事じゃねえんだよ!俺はやらなからな!他の奴にでもやらせとけ!」

「おいフォルト、一緒にやろうじやないか」

「あ!?!達也お前正気か!?!」

「深雪は嬉しいですよお兄様!」

「全然正気じゃねえじゃねえか!起きろ達也!目を覚ませ!その先は地獄が待ってるぞ!」

肩を揺すつてどうにか正気に戻そうとするも、達也の目は虚ろなままだった

「深雪!お前達也に何言った!何言ったら達也の意思がここまで固くなるんだ!」

「涙目上目遣いでお願いました」

「その確殺コンボ(達也限定)にコイツが勝てるわけねえだろ!」

「会長、司波達也並びにフォルティーム・カミールはその指名を受け入れます」

「やったわね!」「お兄様!」

「後ほどじっくり話し合うからもう一回放課後來てね」

「はっ」

「お前ら勝手に決めてんじやねえええええええ!!」

生徒会室の昼休みはフォルトの怒号で終わった

生徒会室で昼休みを過ぎた達也とフォルトは深雪と別れて実習室に向かった

「それで達也、生徒会室での話し合いはどうなったんだ？」

「風紀委員をやれと言われてな」

「なんで？」

「妹と生徒会長から推薦されてな、放課後にもう一度行くことになった」

「ああ、妹に言われたらお前は断らないか」

午後の実習は魔法を使って台車を三往復させる課題で、二科生に教員はつかないので生徒同士で話しているも何も問題はない

「じゃあ一緒に行ったアイツがメチャメチャキレてるのは」

「……今回ばかりは俺のせいだ」

一同は既に課題を終えて隅っこに座っているフォルトを見た。怒っているのが表情

だけでなく赤いサイオンからも見て取れる。普段ならそのイケメン度から何人かの女子はフォルトの周りに集まっているのだが、今の状態のフォルトに近づこうとする勇者はいなかった

「アイツ誰かに自分の事決められるの嫌いだからね〜」

「フォルトさんがあそこまで怒ってるの初めて見ました」

フォルトの口が動いてブツブツ何か言っているので少し近づいて聞いてみた

「達也の奴俺の事まで勝手に決めやがって確かここは申請すれば模擬戦が出来るんだつたなだつたら達也を模擬戦と称してボコボコに出来るって事かまずは両手足の関節外してから持つてるCAD叩き壊して首から下を地面に埋めてからサッカーボールみたいに頭を蹴り回したあとアイツの家族に恥ずかしい話してやる……」

「なんか……とんでもなく物騒な事言ってるやない?」

「達也、お前本当に大丈夫か?」

「……今のは聞かなかつた事にしません?」

「……命の危機を感じるな」

実習の教室でとんでもない殺害計画を口にしながらフォルトの午後は過ぎていった

放課後、達也、深雪、フォルトの三人は言われた通り生徒会室に来了。逃げ出そうとしたフォルトだったが、深雪の要請を受けたエリカ、レオに周りを囲まれ、逃げた先に

達也がいる完全に袋の鼠状態で壁を壊す以外の逃げ場はなく、黒い笑顔の深雪に襟を掴まれて連行された

入室すると、昼にはいなかった男子生徒がいた。入学式の時真由美の後ろにいた生徒のようだ。その生徒は達也と特にフォルトに敵意の籠もった鋭い視線をぶつけたが、深雪の前にやって来て挨拶をする

「生徒会副会長の服部刑部です。司波深雪さん、生徒会へようこそ」

達也とフォルトは無視して服部は席に座る

真由美はあずさに深雪をお願いして、摩利は達也とフォルトを連れて風紀委員室に行こうとした時、服部が待ったをかける

「待つて下さい渡辺先輩、私はその二人の一年生を風紀委員に任命するのは反対です。特にそのフォルティーム・カミーラは」

「……何故だ？」

「過去ウィードを風紀委員に任命した例はありません」

「その呼び方は禁止されている、私の前で使うとは……いい度胸だな」

「取り繕っても仕方ないでしょう。それとも、全校生徒の三分の一を摘発するつもりですか？」

両者睨み合い一触即発の雰囲気の中、空気の読めない男フォルトが声を出す

「……さっさとしてくれない?俺帰ってゲームしたいんだけど」

「……なに?」

フォルトの言葉に最初に反応したのは服部だった

「風紀委員は実力で生徒たちを取り締まる役職だ、ウィードであるお前たちでは務まらないと思つて恥をかく前に親切心で言っているんだ」

「……つまりお前は、俺達が弱いつて言つたんだな?」

「その通りだ」

今日一日で怒りの容量を越えようとしているフォルトだが、どうにか我慢している。肩がプルプル震えているが

「待つて下さい!お二人の力を持つてすれば生徒を取り押さえるぐらい」

「司波さん、魔法師は事象があるがままに冷静に認識出来なければいけない。身内鼻肩に目を曇らせてはいけない」

「お言葉ですが!私の目は曇つてなどいません!お二人の本当の力を持つてすれば。本当に……」

最初は力強く反論していたが徐々に力がなくなる深雪、顔には若干涙が浮かんでいる

「……服部副会長、俺と模擬戦をしませんか?」

「なに?」

「そりゃいいな、俺達が強い事をこの馬鹿に教えてやればもうこんな口聞けなくなるだろ」

「貴様!…一年生の分際で思い上がるなよ!」

ナメられて完全に頭にきた服部は怒り散らして怒鳴った。摩利と真由美に模擬戦の許可を取り、三十分後に第三演習室で行う事が決まった

首の後ろをトンツ

模擬戦が行われる第三演習室にあの場にいた全員が集まった。最初にやるのは達也と服部の模擬戦なので、両者は部屋の真ん中に距離を取って向かい合っている

「ルールは相手を死に至らしめる攻撃は禁止、武器の使用も禁止、捻挫以上の負傷を与えない直接攻撃は有りだ。勝敗はどちらかが負けを認めるか、私が試合続行不可能と判断した場合に決まる。両者なにか質問は？」

「ありません」

審判役の摩利が模擬戦のルールを説明する。両者に質問が無いことを確認して右手を上げる

「それでは…始め！」

「ぐっ!?!」

勝敗は一瞬で決した。摩利が合図した瞬間に床にうつ伏せで倒れた服部、その後ろで立っている達也

「……勝者、司波達也」

小さな声で摩利が達也の勝利を宣言した

「……待て、今のは予め自己加速術式を展開していたのか？」

「それが出来ないのは委員長が一番分かっているのでは？」

「そうなんだが、しかしあの動きは」

「真正正銘自分の身体能力ですよ」

達也の言葉に未だ納得出来ない摩利

「私も証言します。兄は九重八雲に師事していますから、あの程度の動きは出来て当然です」

「あの今果心の九重八雲にか!? そうだったのか…なら納得だ、疑って悪かったな」
「いえ、納得して頂けて良かったです」

深雪が八雲の名前を出すと、摩利も納得することが出来た。九重八雲の名前はフォルトが思っている以上に有名らしい。あのクソ坊主そんなに有名だったのかとちよつと驚いている

起き上がった服部は生徒会室での発言を深雪に謝罪した。ここで達也に謝罪がない
辺り、一科のプライドは健在なようだ

その次は何故服部が突然倒れたかについて説明していた。理論的な説明はフォルトの苦手とする部分なので聞き流していたが、どうやらサイオンの波に酔ったらしい。その流れで達也の持っているCADが『トールラス・シルバー』の作ったシルバー・ホーン

だと判明しデバイスオタクのあずさが興奮して話逸れかけたが、真由美が軌道修正して模擬戦はフォルトの番が来た

「次はカミィラ君の番だけど、服部君いけそう?」

「……すみません、まだ頭が揺れていて無理そうです」

「そうよね、てことは誰か相手になってくれそうなのは」

「なら私が「俺で良ければやるが」」

入り口付近から声が聞こえて全員が振り返ると、かなりガタイのいい男子生徒が立っていた

「十文字君!何でここに!?!」

「偶々通り掛かってな、生徒会メンバーと渡辺が一緒になって模擬戦をやっていたから気になって見ていた」

「ええ〜つと、彼は十文字克人君。この学校の部活動連合会の会頭よ」

「よろしく頼む」

さっきまで模擬戦をしていた達也に視線を向けながら挨拶をする

「司波達也と言ったか」

「はい」

「先程の模擬戦、見事だった。一年生で模擬戦無敗の服部を破った実力、素直に感服す

る」

「……ありがとうございます」

「そしてお前がフォルテイム・カミィラか」

「そうだけど」

「……渡辺から聞いてた通りの男だな」

「アイツが俺の事をどう言ってたかなんてどうでもいいからさ、アンタが俺と戦ってくれるのか？」

「不満か？」

「いや？ どうせ俺が勝つから。なんなら二対一でもいいぜ」

「……言うじゃないか、一年生」

180cmの身長があるフォルトよりも上から見下ろしてくる十文字、フォルトの言葉で気合が入ったようだ

「なら要望通り二対一で相手してやろう。渡辺もそれでいいか？」

「私としては一対一でやりたい気持ちもあるにはあるが、いいだろう。後悔するなよフォルト」

「そつちこそ、同級生と後輩の前で恥かかないようにしろよ」

三人は達也と服部が立っていた場所までそれぞれ移動する。審判役の真由美がルー

ル説明をするが、そこでフォルトが訂正を加える

「そのルールだけど、お前ら俺の事殺す気で来ていいよ。そうじゃないと面白くないし」「カミィラ君、いくらあなたが強くても相手はあの十文字君と摩利よ。分が悪いわ」

「いいから言う通りにしろって」

「でも……」

「大丈夫って、俺最強だから」

自信たつぷりかつ獐猛な野獣のような笑みで言うフォルトに、真由美はルールを審判ジャッジの部分だけ残し、他は無制限のルールに変更した

「本当にいいんだな？ 怪我しても知らないぞ？」

「逆に怪我しないように気を付けろよ？」

審判の合図を待つ三人、緊張感のある空気が流れる

「それでは……始め！」

「！！」

開始の合図とほぼ同時に動き出したのは摩利と十文字だった。摩利はプレスレット型のCADと刀を装備し、十文字はC携帯端末型ADを使い障壁を多重展開するファラックスで突進してきた。一方フォルトはその場から一步も動いていない。ズボンのポケットから手を出してすらない

「達也と深雪以外のその場にいた全員が決まったと思ったが、その光景は訪れなかったな!」

「……え?」

摩利が振り下ろした刀も、十文字のフアランクスも、どちらもフォルトの体を傷つける事はなかった。傷つけるどころか服にすら触れていなかった。これ以上は無理だと感じた摩利と十文字は一度フォルトから距離をとる

「ん?今なにかしたか?」

「……どういふ事だ、刀がアイツの服の上で止まったぞ」

「俺のフアランクスもだ。手応えはあるんだが」

考えても考えても答えは出ない二人。真剣になっている二人に対してフォルトは欠伸をしている

「ふあああああゝゝゝ、眠くなってきたからそろそろ終わらせるから……ちやんと防げよ?」

「!!……来るぞ!十文字!」

「ああ!」

ただならぬ気配を感じ取った摩利は十文字に声をかける。どちらともフォルトから目を離すまいと凝視してから数秒後、フォルトの姿が消えた。スウーッと消えるのでは

なく、一瞬でその場から消えたのだ

「……どこに消えた!」

「全く見えん……」

目の前で起きた事に動揺し叫ぶ摩利、冷静に周囲の確認をする十文字。見ていた他の生徒も周りを見回している

「お眠り」

「がっ!? な……に……」

「ぶふっ!」

背中合わせに立っていた二人の間に現れたフォルトは摩利の首に手刀を叩き込み、摩利の声で後ろを向いた十文字には顎に的なる右ストレートを打ち込んで沈めた

「……こんなもんか」

「勝者……フォルティーム・カミーラ」

驚きすぎて声小さくなった真由美によって、フォルトの勝利が宣言された

気絶した二人をフォルトが魔法で治癒して起きた後、フォルトへの質問攻めが始まった

「……おいしいフォルト、最初に私達の攻撃が止まったのは何をしたんだ?」

「空間を削り取った」

「……は？」

「空間が無けりや俺に攻撃当てるのは無理だろ」

「…無茶苦茶だな」

現代魔法では考えられない魔法を使ったフォルトには、他のメンバーも啞然としていた

「では目の前で消えたのは？あれも魔法なのか？」

「あれは俺の存在感を消したんだ」

「存在感？」

「ただ姿を消すだけじゃ面白くないからな。いつでもイタズラし放題だったこと。達也には何度もやってるしな」

「……そんな事が可能なのか」

現代の魔法理論を超越している超技術を駆使して下らない事をやっている発言は無視して、フォルトの力にただただ感心と関心を見せている十文字

「さてそこで見ている達也に瞬殺された人、俺の力は分かってくれたかな？」

「……悔しいがな。あのお二人を無傷で一撃で沈めた奴には勝てる気がしないな」

「という事は？」

「……………」

「すること、あるよね？」

「……………た」

「ん？聞こえないな〜〜」

「……………な……………つた」

「〜〜〜!!すまなかつた!!」

「うむ、苦しゅうない」

顔を真っ赤にしながらいかに謝った服部を見て悪い顔で笑っているフォルト

「では納得したところで、今度こそ風紀委員室に行こうか」

「ああ、俺は帰らせて貰うわ」

「なんかあるのか？」

「ちよつとな、じゃ達也、後は任せた」

「は？……………しようがない奴だ。委員長、行きましょう」

「そうだな」

フォルトの性格をよく知っている二人は特に気にせず部屋に行くことにした

こうして、波乱の二日目は幕を閉じた

四葉つて行動力凄い

達也とフォルトの風紀委員入りが決まってから翌日、彼等の出番は早速やって来た。「クラブの勧誘で風紀委員が出張ることなんてあるのか？」

「ああ、一高の勧誘期間は生徒たちにCADの携帯が許可されているから魔法を使った事故や違反が起きやすいらしい。だから今日の放課後から風紀委員の活動が始まるぞ」

「……なあ達也、そう言えば俺昨日勝負はしたけど入るとは言っていないよな」

「そう言えばそうだな」

「てことは俺は風紀委員じゃない」「駄目だ」……」

「そこをなんとか……」

「お前がそれを敢行するのなら、風紀委員総出で探し出すからな」

「……チツ」

精一杯の舌打ち、この場は達也の勝利で終わった

放課後、新入生含めた全風紀委員が集まった。中にはフォルトに一撃で沈められた森崎もいるが、達也の顔を見て何でお前がいるのだとキレだったが達也の後ろから出てきたフォルトを見た瞬間、顔を青くして静かに席に座った

「あいつ何がしたかったんだ？」

「さあな」

「会議を始めるぞ！席につけ！」

摩利が席についたところで会議が始まった。部活動勧誘期間はCADの使用が許可されている、なのである程度の強硬手段は取ってもいいらしい。数人の二年生は達也とフォルトの実力に疑問の声を上げたが、達也が服部を、フォルトが摩利と十文字の二人を瞬殺したことを話すとそれ以上何かを言う者はいなくなった

「質問はないな？では行くぞ！」

風紀委員の活動が始まった。各々が持ち場に向かう中、達也とフォルトは部屋に残っていた。森崎は先に行った

「君たちにはCADを支給しておこう。なにか要望はあるか？」

「では俺はこの二つを」

「ほう、君はCADを二つも使うのか。フォルトはどうする？」

「俺はいいや」

「そうか、では二人とも持ち場に向かってくれ」

CADを受け取った達也は前から約束をしていたエリカの元へ、特に用事のないフォルトは校内をブラブラする事にした

「はいそこ強引な勧誘禁止〜」

「何だこれ!? 動けねえ!」

「乱闘は外でやってね〜」

「ぶべらっ!!」

出会う違反勧誘を片っ端から拘束、鎮圧していくフォルト。その光景から彼が通る廊下ではいき過ぎた勧誘は殆ど見られなくなった。そんなフォルトがゲーム片手に歩き回っていると、何処かの部屋に着いた

「フォルト!」

「達也?」

達也の叫ぶ声が聞こえてゲームから視線を上げると、竹刀を持って襲いかかってくる男子生徒が見えた

「どけええええ!!」

「うるさっ」

振り下ろされる竹刀を片手白刃取りで掴み取り、そのままへし折った。その後呆然としている男子生徒の後頭部を掴み床に顔から叩きつける。床が若干ひび割れるぐらい

の力で顔を打ち付けた男子生徒はピクリとも動かなくなつた

「おい達也、どういふ状況だこれは」

「演武中の剣道部に剣術部が乱入した。その乱入した生徒は女子生徒を狙っていたんだが、偶々お前が二人の間に入ったから襲われるような形になつた、つてところだ」

「二人とも、この状況でよく普通に会話出来るわね……」

人間離れた光景に静まり返つた部屋に達也とフォルトの緊張感のない会話とそこにツツコむエリカの声のみが響いた

「桐原先輩でしたか、魔法の不適切使用で連行します。と言つても返事は出来ないでしょうが。フォルト、背負つてくれ」

「ええええ、何で俺が」

「お前が沈めたんだろが」

「いやあれはしようがなくね？」

「いいから、保健室に連れてくぞ。そうしないと終わらないぞ」

「はあく、コイツが突つ込んでこなけりや……」

よっこいしよつと倒れた男子生徒を俵を担ぐように持ち上げて達也と歩いていく。

剣術部の部員が反論の姿勢を見せたが、これ以上面倒事を抱えたくないフォルトの一睨み全員黙つた

「以上が剣道部と剣術部の事件の顛末です」

「まずは事態の収束感謝する。フォルティーム、お前が桐原の高周波ブレードを素手で掴み取り竹刀を折ったのは本当か？」

「そうだけど」

「……あの魔法は殺傷ランクBに当たる魔法なんだがな」

「十文字、コイツの規格外は考えるだけ無駄だぞ」

「そうだな……だが、桐原を気絶させたやり方は頂けない。明らかにやりすぎだ」

「いや、急に来られたら力入っちゃったから」

「壊した床はどうするんだ」

「俺が魔法使つて直しとくよ」

「……はあ」

これ以上話しても規格外のネタが出てくるだけだと思つた十文字は早々に会話をやめ、二人に退出の許可を出した。二人きりなつた十文字と摩利はフォルトについて会話を始める

「アイツは昔からああなのか？」

「そうだな、突然千葉家の道場に来て「剣の腕を確かめたいからここで最強の奴と戦わせろ」、とな」

「それはまた」

「あの場にいた全員が馬鹿だと思っていたさ、勿論私もな。だが、シユウと試合をした時は戦慄したな」

「まさか……」

「シユウは一撃でやられた。その知らせを聞いた千葉家の当主や他の者も挑んだが結果はどれも惨敗、アイツには一撃も入れれなかつた」

「あの幻イリュージョン・ブレード影 刀でさえ手も足も出せない程の実力者か」

「おそらくこの世界にアイツに勝てる奴はいなんじゃないか？条件付なら分からないが」

「……………」

十文字は摩利からフォルトの事を聞いて危惧していた。十師族という立場上、日本を脅かす者は許す事は出来ない、それが例え下級生でも。もしかしたら師族会議に提出する案件になるかもしれないと考えている。それに以前九島烈から言われたあの言葉

『今度一高にフォルティーム・カミィラという生徒が入学する。あの者の不機嫌を買うような状況だけは避けるべきだ。下手したら一高、果ては日本が地図から消えることになる』

「あれは、どういう意味だろうか」

「何か言ったか？」

「いや、何も」

一度奴の本当の実力を見てみるべきなのかもな、と考えたところで桐原の処分の話に頭を切り替えた

十師族の次期当主に目を付けられた事など知らないフオルトは達也と深雪、それに他の友達も含めて下校していた

「風紀委員活動はどうでしたか？」

「トラブルはありはしたがイメージしてた程ではなかったな」

「意外と簡単だった」

特に興味もないような口ぶりで答える二人に、深雪はやわらかく微笑む

「ふふ、それは良かったです」

「深雪の方はどうなんだ？」

「楽しいですよ。中条先輩は丁寧に教えてくれますし」

「そうか、良かったな」

今度は達也が柔らかく微笑む。深雪には穏やかで楽しい学校生活を送って欲しいと願っていた達也も今の周りを取り巻く状況には一安心している

「ねえ、この二人ここが喫茶店てこと分かってる？」

「完全に二人だけの世界に入ってるね」

「もうカップルってことでいいんじゃないかねえか？」

「ケーキうま」

今彼等がいるのは駅近くのカフェテリア。達也とフォルトが予想外に遅れた事のお詫びとして一人千円以内で奢ると言ったのだ。勿論フォルトは反対したが口喧嘩で達也に勝てるはずもなく。だったら自分でも食うと言ってさつきからケーキと紅茶を食べている

「そう言えばアンタ、素手で高周波ブレード掴んでたわよね。おまけにそのまま竹刀折ってたし。どんな身体構造してんのよ」

「は？あれぐらい出来るだろ」

「いやいや、あの魔法って殺傷ランクBだからな？それを素手で掴むなんて無謀もいいところだぜ」

「そうですよ、何かあったらどうするんですか」

「逆に俺に何かあるような事起きると思うか？」

「「思わない」」

「だろ？」

むしろコイツをどうにか出来るような人がいるとしたら見てみたいとも思っている

三人だが、その間も深雪は達也の肩に寄り掛かりイチャつくのをやめない

「もう放っておきましょう」

「だな」

「そうだね」

「ケーキ紅茶うま」

「アンタはどれだけ食べてんのよー」

「こちらも終始スタイルを崩さないフォルトだった

「これがデジャブってやつか」

家に帰ってきたフォルトは家の鍵が開いている事に気付いて一度離れてみると、二階に明かりが点いているのが見えた

「……もしもし達也、また俺の家に知らない奴が入り込んでるんだが」

『またか？それは防犯の問題が…母さん？いやフォルトの家にまた知らない人が……ご当主？』

「は？…当主」

『……もしもしフォルトさん深夜です。恐らく四葉家当主の四葉真夜です、さつき執事

の葉山さんから連絡がありました』

「なんでそんな人が家に不法侵入紛いの事してんの？馬鹿なの？」

『否定はしないわ。妹は人との距離の取り方が下手でね、変なところで思い切りがいいから』

「……とりあえず害は無いって事でオーケー？」

『オーケーよ。葉山さんにもキツク言っておいてって言っておくから』

「了解」

電話を切ったフォルトは意を決してドアを開けた

「ただいま」

「おかえりなさい」

「四葉真夜さん、あなたを不法侵入で訴えます。理由はおわかりですね？」

「いきなり!?!いや勝手に入ったのは悪かったけど!」

「訴える先はあなたのお姉さんと葉山さんです」

「やめて!姉さんは兎も角葉山さんはやめて!四葉本家と分家含めて一番怖いのはあの
人!」

「刑罰は懲役ではなく書類仕事です。葉山さんの監視付きで」

「なんかもう刑確定で話進めてない!?!情状酌量の余地は無いの!?!」

「今の状況で葉山さんがその判断を下すとても」

「くっ！そんな事しないわって言えないのが辛い！」

玄関先で一頻り真夜を弄った後、フォルトは部屋に上がり何故来たのかを真夜に聞いた

「だって姉さんは自分の子供の家に住んで寂しかったし、私も温かい家庭で過ごしたい
なと思って……」

「深夜さ——ん！聞いてますか——！あなたの妹さんあなたに嫉妬してますよ——
!!」

「やめてよ——」

顔を真っ赤にして抗議する真夜、楽しげに笑うフォルトの声が響いている

「それでね……部屋に……」

「部屋に？」

「自分の荷物運んじやった♪」

「もしもし葉山さん？有罪判決です」

『分かりました。書類の準備をしておきます』

「何でもう電話してるのよ——」

超特急で葉山さんが自宅に特攻して真夜を説得するものの、頑として譲らない真夜

「どうしてもですか？」

「どうしてもです！」

「はあ……フォルティムさんご相談があるのですが」

「何でしょう」

「なんで葉山さんにだけ敬語なんです!？」

「この自宅の一室を真夜様の書斎にするというのは駄目でしょうか」

「書斎にですか」

「このままでは真夜様はどう説得しても本邸には帰らないでしょう。ですので私と真夜様をこの家に居候という形で住まわせては頂けないでしょうか」

てつきり強制的にでも連れて帰ると思っていたフォルトは葉山の提案に驚いている

「失礼なのは重々承知です。四葉家序列一位の執事としては本邸にお帰り頂きたいですが、真夜様を子供の頃から見ていた爺としては一人の女性として幸せになって欲しいのです」

「葉山さん……」

「お転婆なのは変わっていませんが」

「いい話で終わらせる気は無いんですか!？」

「……分かりました。居候を許可します」

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げて礼を言う葉山。目には涙が滲んでいる

「それでは真夜様、フォルティムさんも許してくれた事ですし」

「葉山さん、フォルトでいいよ」

「そうですか、では改めて、フォルトさんも許してくれたところで、やりましょうか」

「な、何をですか？」

「書類仕事です」

「いやでももう遅いし」やりましょうか？」……はい」

「じゃあ俺は夕食と書類仕事の合間にでも摘めるものを作りますね」

その日フォルトの家の一部屋は夜遅くまで電気が点いていた。ちなみにフォルトが『フォルト呼び』を許可するのは信頼の証である。今後その呼び方が増えるかは、分からない

『ブランシュ』

高周波ブレードを素手で掴みへし折った噂は瞬く間に一高生徒全体に広まり、例年より風紀委員の検挙件数は少なくなっていた。たが二科生の達也が一科生を取り締まる事が面白くない連中の達也に対する嫌がらせは何度か見られた

「はいお前魔法使ったな、逮捕」

その度にフォルトが先回りして実行犯を捕まえる光景も、今では見慣れるぐらい当たり前になっていた

「はあく……疲れた」

達也のフォローに走り回ったフォルトは一休みするために庭の隅にある木陰で寝転んでいた。周りには音と存在を消す魔法で壁を作っていた。そこでしばらく休んでいると、遠くの方で達也と女子生徒が二人で一緒に歩いて何処かへ行くのが見えた

「……案件だな」

そこからの行動は早かった。まずその光景を写真に収め、次に深雪にさっきの写真をメールで送信、深雪からの返信メールを確認してニヤツと笑ってから端末を仕舞う

「いい仕事した」

そう呟いたフォルトは目を閉じて眠りについた

フォルトが眠つてから二時間経つて、端末が鳴った

「……………うるさ、もしもし?」

『おいフォルト、今何処にいる。もう下校時間だぞ』

「んあ?」

時間を確認するともう三時を過ぎて四時になろうとしていた

「ああ、すまん、今まで庭の隅の木の下で寝てたわ」

『あそこか? お前の姿なんて見なかったが』

「消音と存在隠蔽の魔法で壁作つたから」

『お前がそれ使つたら誰も見つけられないんだからな、あんまり使うなよ』

「悪い悪い、善処するよ」

『それは改善しない奴が使う言葉だ……とにかく早く来い、みんな待つてるぞ』

「へいへい」

気怠げに立ち上がったフォルトは一度大きく伸びをしてから教室に置いてある鞆を取りに行くために歩き出した

「そう言えば達也君、昨日壬生を言葉責めしていたと聞いたがそれは本当か？ 壬生が顔を真っ赤にしてカフェから出てきたのを見たという人がいたのだが」

昼食時、摩利から特大のダイナマイトが放り込まれ、場の空気が凍った

「お兄様……私、昨日見てしまったんです。お兄様が女子生徒とカフェでなにやら話しているのを」

達也の横にいた深雪によつて、室内が物理的にも凍りだした

「なんで深雪がその事を……フォルト」

「ん？」

「お前だな？」

「風紀活動のお返し」

一見すればいい笑顔だが、そこには「してやったり」や「ザマアｗｗｗｗ」みたいな嘲笑の感情が見て取れた。反論しようとした達也もこれまでの風紀委員の活動を出されては何も言えず、フォルトを問い詰めるのはやめた

「……壬生先輩にはフォルトの事を聞かれたんですよ」

「は？」

予想してなかった切り返しに驚くフォルト

「なぜカミーラ君の事を？」

「剣術部と剣道部の一件でお礼を言いたいと」

「直接言えばいいじゃないのか？」

「コイツは無意識に気配を消しますから、並大抵じゃ気づかないんですよ」

達也の言い様に納得を示す生徒会メンバーと摩利、事実フォルトは存在隠蔽の魔法を使つて様々なイタズラを仕掛けている

「じゃあなんでその話から壬生が顔を真っ赤にする事になるんだ？」

「何故かその話から俺を剣道部に勧誘してきまして……」

それから達也は昨日の壬生との会話を語つた。基本的には一科と二科の差別に対する思いだったのだが、その会話の中で摩利は何処かおかしいと感じていた

「あくまで風紀委員は名誉職だ、内申になんの関係もないのだが」

「ええ、それでデマを流しそうな奴らに心当たりはありませんか？」

「ううん、知らないわ。噂の出処なんていくらでもあるし」

「知つていれば注意しているさ」

知らないと言う真由美と摩利の発言にフォルトの目が光る

「ダウト。つけない嘘なら言わないほうがいいぞ」

「!!」

彼女達が嘘をついていると見たフォルト。フォルトの注意に明らかに動揺を見せる

「……何を言ってるのかしら?」

「動揺が目に見えてわかる。もうちよい上手く隠せないのか?それに、達也が聞きたいのはそつちじゃない」

「フォルトの言う通り、自分が聞きたいのは末端ではなくその背後の存在。例えば…魔法国際政治団体『ブランシュ』、とか」

「なっ!」

「どうしてその名前を!?情報統制はされている筈なのに……」

達也から出た『ブランシュ』という単語に過剰なまでの反応を見せる真由美と摩利。国が情報統制を敷いている筈の名前を一高校生である達也が何故知っているのかということは勿論、一高内でもその存在は確認済みであるため、より過敏に反応してしまっただけだ

「情報統制されているとは言え噂の出処を全て塞ぐのは無理です、この事は明らかにするべきなのは?」

「そうね…魔法を敵視する集団がいることを隠して、正面から対決することを避けて…」

「会長の立場なら仕方ないのでは？」

そこからは自分で下げて上げるタラシ特有の話だったのでフォルトは聞き流した。一通り話が終わった頃を見計らってフォルトが喋り出す

「要はさ、生徒会長だから行動が出来ないんだろ？ だったら一生徒なら問題ないよな？」

「まさかフォルト君、団体相手にあなた一人で殲滅するつもり!? 危険よ！」

「真由美の言う通りだ！ いくらいお前が強くても！」

摩利がそこまで言ったところで昼休み終了のチャイムが鳴った

「……今日のところはここまでにしよう」

「くれぐれも危険な行動はしないでね」

その場はそのまま解散になった

午後、授業が終わった達也とフォルトは風紀委員室で仕事をしていた。いつの間にか事務仕事が板についた達也と検挙数No. 1のフォルトはいつも通り仕事をしている

「ん？……悪い達也、なんか呼び出し受けたから行ってくる」

「何処にだ？」

「カウンセラー室」

何故カウンセラー室から呼び出しを受けたのかイマイチ分からないがとりあえず来たフォルトは扉を開けて中に入る。中にいたのは入学式の時教室に入ってきた女性

だった

「いらつしやいフォルティム・カミール君、私の名前覚えてるかしら」

「いや覚えてないけど、なんか用か？用があるなら早く終わらせてくれ」

「やっぱり覚えてないのね…私の名前は小野遙、この学校でカウンセラーをしているわ」
着ている白衣の胸元が大胆に開いている小野は姿勢を若干前傾にしてフォルトに近づく

「……お前、あのクソ坊主の弟子か何かか？」

その言葉で小野は動きを止める

「お前のその相手の情報を探ろうとする仕草、自分の持つてる武器を理解した上で攻めてくる姿勢、あの九重とか言うクソ坊主にそっくりだ」

「……何を言ってるのかしら？」

「そういうしらばっくれとかいいから、どうせ何処かの組織から俺の事探れとか言われてんだろ？」

「……あなた一体何者？」

「ただの善良な一般市民さ。用件はそれだけか？…じゃあ帰らせて貰うわ」

小野からの質問が出なかつたので勝手に帰ろうとしたフォルトがドアを開けた時、小野が質問を投げかけた

「あなたは日本を脅かす側の存在なの？」

小野の問いかけに振り返ったフォルトはこう答える

「それはテメエら次第だ。じゃあな」

ドアを閉めた後のカウンセラー室では、フォルトの異様な雰囲気飲まれた小野がただ呆然としていた

家に帰ったフォルトはリビングで寛いでいた真夜に達也が言っていた『ブランシユ』について聞いていた

「なるほどね、さすがは達也さんと言ったところかしら」

「そうですな」

「甥自慢はいいからさ、その『ブランシユ』ってやつ的事教えてくれよ」

「簡単に言うと、魔法を使って反魔法運動紛いのテロを起こしているテロ組織よ」

「なにその矛盾した組織」

「で、その下部組織に『エガリテ』ってのがあるんだけど、一高にちよっかい掛けてるのは恐らく『エガリテ』のほうね」

否定している魔法を使って魔法反対してるって、バカなのか？と思ったフォルトだが、それは真夜も同意だった

「そいつらの拠点って分かる？」

「家の諜報関係の分家に情報は掴ませてるけど、どうするの？」

「殲滅しようかなって」

まさかの発言に真夜も葉山も一瞬黙ってしまった

「……本気？」

「いくらなんでも、数の有利というものが……」

「葉山さん、数の有利ってのは実力が同等レベルで初めて出来るものなんだ。そこいらの雑魚が群がったところで有利になんかならないよ」

圧倒的自信を持って言うフォルトに真夜も葉山も笑みが溢れる

「そこまで言うなら教えるわ。奴らのアジトは……」

真夜から『ブランシュ』と『エガリテ』のアジトを聞いたフォルトは達也に連絡を取る

「こんな時間に悪いな」

『それはいいんだが、なんかあったか？』

「ちよつと報告をな……お前、俺の本気見たくないか？」

突然の事に達也も電話口で口ごもった

『何が言いたいのか分からないんだが』

「さつき真夜から『ブランシユ』と『エガリテ』の拠点を聞き出した」

『……なるほどな。見たくないと言ったら嘘になるな』

「だろ？」

『でも少し待ってくれ。今壬生先輩の返事を待っているところだ、攻めるならその後にしてほしい』

「ええ〜、やる気出したのに〜」

駄々をこねてどうにかすぐにも殲滅に行こうとしたフォルトだったが、途中から参戦した深雪によって口論で封殺されたフォルトは渋々達也に従う事にした

グツと引いて伸ばしながら拳を捻る

勧誘期間も終わり授業が本格的になつてきた。フォルトは昨日の夜達也に言われた通り『ブランシユ』と『エガリテ』の拠点の割り出しだけに留めて、襲撃は我慢している。しかし達也に会う度に「話し合いは終わったか?」「いい加減ウザくなつてきた」と言い続けている。言われる達也も参つてきたようで、もうGOサインを出してしまうかと思ひながら今日もいつも通り学校生活を……

『在校生の皆さん!!』

……送れる訳が無かった。校内のスピーカーからハウリングする程大音量で流れてきた放送に、他の生徒達も何事かと文句を口にする

『失礼しました。僕達は学内差別撤廃を目指す有志同盟です。僕達は生徒会と部活連に對して対等な立場での交渉を要求します!』

放送はそれだけで終了した。放送を聞いた生徒たちはざわめいているが達也は溜息を吐きながら立ち上がる

「フォルト、渡辺先輩から召集だ、行くぞ……いない」

「アイツなら放送が流れた瞬間出てったわよ?」

「本当か？」

「何処行つたかは知らないけど」

「……そうか、ありがとう」

お仕事頑張つてね、といい笑顔でエリカに送り出された達也。途中合流した深雪と現場に行くとき既に達也とフォルト以外の生徒が集まっていた

「遅いぞ。フォルトはどうした」

「すみません。放送が流れた瞬間に何処かに行つたと聞きましたが何処に行つたかは」
「全く……まあいい、状況を説明するぞ」

渡辺は現状を達也と深雪に伝えた。電源を切られて放送は出来ないが、立て籠もっている放送室の内側から鍵を掛けていて扉が開けられないらしい

「外からは開けられないんですか？」

「連中がマスターキーを盗んでいてな」

「明らかな犯罪行為じゃないですか」

相手を暴発させない為にも慎重に行くべきと進言する市原、多少強引にでも早期解決を図るべきと言う渡辺。答えの出ない問答を切るように達也は十文字にどうするか聞いてみた

「俺は交渉に応じてもいいと思つている。だが学校施設を破壊してまで早急に解決する

べきかと言われれば、そこまでの犯罪性は無いと思っっている」

「なるほど」

十文字の意見を聞いた達也は端末を耳にあてる

「壬生先輩ですか？ 司波です」

『おう達也』

「……………」

壬生に電話した筈が、聞こえたのは聞き慣れたあの声。達也は無言で通話を切った

「お兄様？ どうかなさいました？」

「何があつた？」

深雪と摩利は普段しない達也の行動に少し心配になり声を掛けるが、達也は大丈夫と

言つてもう一度掛け直す

「……………もしもし」

『無言で切るなんて酷い奴だな』

「……………順番に聞いてくぞ、まず、なんで壬生先輩の端末からお前の声が聞こえる、フォル

ト」

フォルトが中にいる、達也の言葉からそれを察した周りの生徒達は最早言うことが見当たらなかった。摩利と深雪はフォルトの突拍子も無い行動に慣れているので俯いて

目頭を抑えるだけに留まった

『なんであつて、その壬生つて奴の端末持つてつからだろ』

「つまりお前は今放送室の中にいるんだな？」

『そうなるな』

「中にお前以外に生徒がいる筈だ。彼等はどうした？」

『俺の目の前に転がつてっけど』

やっぱりかと達也は思った。基本的にフォルトがフラつと人知れず何処かに行った時は決まつて予想の斜め上の結果（良い意味でも悪い意味でも）が超特急でやってくるのだ

「……手荒な真似してないだろうな」

『クソ雑魚な魔法撃つてきたからコークスクリューブローブチ込んだけど』

「……何処にだ」

『女は顔はマズイだろうから鳩尾に、他の野郎共は顔面』

もう聞いてて頭が痛くなつてきた達也、だがここまで来たら最後までやり遂げなくては、その思いで話を続ける

「取り敢えずお前が倒した生徒連れて出てこい。みんな部屋の前にいるんだ」

『おーおー勢揃いで。分かったよ、んじゃ』

「……はあ」

「あの、お兄様、もしかして今のつて」

「ああ、何故かは知らないがフォルトが中にいて制圧してくれたらしい」

通話を切つてから十数秒後、フォルトが倒れた生徒を俵担ぎしながら出てきた。手には盗まれたマスターキーを持っている

「ドーも皆さんご苦労様、ご所望の商品は此方で大丈夫ですか？」

「それは流石に酷いだろう……」

床に落とした生徒達を商品と言つた挙げ句、目上の先輩にご苦労様と言つたフォルトに効いてないだろうが一応ツツコミを入れておく

「んっ……」

「お、起きたか。結構タフだな」

床に落とされた事で意識を取り戻した壬生。目を開けたら周りを風紀委員と部活連の代表に囲まれている状況に怯えている様子だ

「なあ達也、ここまでされたんだ。もういいだろ？」

「いい、と言いたいが、それを俺の一存で決める訳には」

「じゃあ決めて貰おうぜ、この場に十師族が二人もいることだしよ」

真由美と十文字を見るフォルト、フォルトの不敵な笑みを見た二人は迅速に行動して

人払いを済ませた。達也と深雪もこの場は空気を読んで先に帰った。生徒会室に移動した三人、ここで真由美は更に念には念を入れ生徒会室に防音障壁を張って外に声が漏れないようにした。重苦しい空気感に包まれた室内では三人が互いに睨みを利かせている

「人払いは済ませた」

「それでフォルト君、私達に決めて欲しい事って？」

「……俺の本気、知りたくない？」

「っ!!!」

これまでには見たことのないフォルトの表情、戦いに飢えている戦闘狂が見せるような表情が今のフォルトにはある。授業中も風紀委員の活動中も学校生活では一度も見たことの無い表情に息を呑む二人

「というかお前ら、俺の事知ってるだろ？下手くそな芝居とかいいから」

「……何時から気付いていた」

「そのの女が近づいて来た時から」

「えっ!?!私!?!」

まさか自分が近づいた時からだとは思いつかなかった真由美から出た驚きの言葉、十文字もこれには驚いている。普段から人を弄って遊んでいる真由美は基本的に何が本

音で何が建前か傍目には分かりづらい所がある。十文字でさえ偶に読み違える事があ
るレベルを初見で見抜いたフォルトはやはり只者ではない

「……老師、九島烈殿から十師族全体に通達があった。今年第一高校に入学するフォル
ティーム・カミーラという男の怒りを買うような事は絶対に避ける、と」

「それを聞いた私達は立場を利用して密かにあなたを監視するよう言われたのだけれど
……」

「まあそうなるわなあー、自分たちの立場、ひいては日本の存在そのものを脅かすような
奴を野放しにしておく訳無いだろうとは思ってたよ。で、最初の話に戻る訳だ」

「……お前の本気を我々十師族に見せる事か」

「十文字は理解はしたが納得はしていない様子だ。真由美もイマイチいい顔はしてい
ない

「こつちは『ブランシユ』に『エガリテ』の拠点も分かってんだ。この国の病巣を取り除
いてやり、さらに危険人物の詳細なデータも取れる、権力と国大好きなお前らにはまた
とない好条件だろ？」

「……そこまで分かっているのか」

「十文字君、ここは一旦持ち帰って報告したほうが」

「……そうだな。フォルティーム、今ここで俺達に答えは出せない、そこで一旦家に持ち

帰ってちゃんと審議する。結果は後日でいいか？」

「また待つのかよー、はあ、とっとと許可取ってくれよ、俺の友達に被害が出たら許可が出て無くても行くからな」

「……明日には結論を出す、七草もそれでいいな」

「私は構わないけど、あの狸親父がどんな条件突き付けてくるか」

「そこは知らね、話はそれだけだから、そんじやあまた明日……良い返事期待してるよ」

一足先に部屋を後にするフォルト、残された十文字と真由美は数分話し合った後、障壁を解除して部屋から出て学校を後にした。空は若干暗くなって夜になりかけている時間だ、夜道に気を付けて二人は帰って行った

王の雫

騒動があつた翌日、通学途中でフォルトは達也からその後の成り行きを聞いた

放送室を占拠していた連中を拘束した後、学校側が事態を生徒会に一任したらしい。明らかに面倒くさいから関わらんとこ、という魂胆が丸見えなのだが、学生という立場上従うしかない。そこで真由美は有志同盟の提案を聞き入れて討論会を開くらしい。複数の有志同盟に対し生徒会側は真由美一人でやり合うとか

ここまで聞いたフォルトは率直に「絶対仕掛けてくる」と達也に言った。そこは勿論達也と深雪も分かっていたらしい。そこで会場内の警備を達也と深雪に任せ、フォルトは外から侵入してくるであろう本隊を叩く事を決めた。学校に着いてその事を摩利に報告したところ快諾、自分は真由美の警備に当たると進言し、緊急事態時の警備は一部ながら決まった

そして討論会開始時間になった。会場である講堂にはまばらながらも多くの生徒が座っている。その光景を見た鈴音からカリキュラム強化という絶望的な言葉が飛び出したが、どうにか摩利が説得して地獄が顕現する事は無くなった

その間も討論は進んでいく。有志同盟は一科と二科の差を中心に攻めていくが、明ら

かに論に隙きが目立つ。真由美はその隙きを突きながら着実に逃げ道を塞いで攻めていく。その時、風紀委員全員のインカムにフォルトから報告が入った

『外に黒塗りの武装車両を確認、各自準備しとけ』

「分かった。報告感謝する」

討論会が生徒会側の勝利で終わった瞬間、講堂全体が揺れて爆音が響いた。その音を合図に動き出した有志同盟もとい『エガリテ』のメンバーと、それを拘束しようとする風紀委員、当初の予定通り摩利は真由美の傍に、達也達その他の風紀委員は拘束に回った

「こちら司波達也、フォルト、外はどんな状況だ」

『正面から入ってきた連中は片付いた。ただ図書館辺りに昨日の壬生って先輩とその他に二人気配が見える』

「分かった、そつちは俺と深雪に任せろ。お前は後片付けを頼む」

『はいはい、了解しましたよ上官』

フォルトとの通信を切り摩利の元へ向かう。通信越しに会話を聞いていた摩利はすぐに図書館に行くよう二人に言う。許可を得た二人は走って図書館に向かう、扉を開けるとそこには何かを盗み出そうとする男が三人に、それを立って何かを考えている顔で見ている壬生の姿があった

「お前達の企みもそこまでだ」

「なに?! いつの間に!」

「記憶キューブも壊れてるぞ!」

「司波君……」

どうやら記憶キューブで文献を抜き取るうとしていたらしい。達也の分解魔法でキューブを破壊された事には気付いてないが、咄嗟に銃を構えて撃とうとしたが、深雪の減速魔法で出来た冷気が構えていた手に当たり、急激な低温火傷で苦しみ悶える

「愚かな真似は止めなさい。私がお兄様に向けられた害意を見逃す訳が無いでしょう」

「……壬生先輩、これが現実です」

「え……」

「才能も適性も、全てが平等な世界があるとすれば、それは誰もが平等に冷遇された虚しい世界。何処かで思っているんでしょう、あなたは利用されたんです」

「……………」

「今この学校の現状が、あなたが他人から与えられた聞こえの良い理想の現実です」

容赦のない達也の言葉が壬生に刺さる

「どうしてこうなるの……差別を無くそうとしたのが間違いだったと言うの?! あなただって、何時も出来の良い妹と比べられてきたのでしょうか! そして不当な扱い、侮辱を

受けてきたはず！誰からもバカにされてきたはずよ！」

その言葉に反応したのは深雪だった

「私はお兄様を蔑んだりはしません」

その言葉に壬生は顔を向ける

「例え人類の全てがお兄様を誹謗中傷しようと、蔑もうと、私達家族はお兄様に変わらない敬愛を捧げます。確かに世の中にはお兄様を侮辱する無知な者は存在します、この学校にも。でもそれ以上に、お兄様の素晴らしさを認めてくれる人達がいるのです」

深雪は壬生を見て続ける

「壬生先輩、あなたは可哀想な人ですね」

「なんですって……」

「あなたにはこれまでの人生で、認めてくれる人がいなかったのですか？魔法だけがあなた自身を測る全てだったのですか？お兄様はあなたを認めてましたよ」

「え……」

驚いた顔をする壬生、まさか自分が達也にそんなふうに思われていたなんて

「あなたの剣の腕、あなたの容姿を、認めています」

「……そんなもの、上辺だけのものじゃない」

「それも含めてあなた、壬生沙耶香なのでしょう。あなたとお兄様は知り合って間もな

い、そんな相手に何を求めているんですか。承認欲求の塊ですかあなたは」

「それは……」

「今までの事も含めて、自分をウィードと蔑んでいたのは壬生先輩、あなた自身ですよ」
「そこまで聞いていた男達が動いた。スモークを焚き壬生にアンティ・ナイトを使うよう指示。心が揺れている壬生は指示通りアンティ・ナイトを使用。達也は深雪を背に守るように構え、視覚情報に惑わされないように目を閉じ精霊エレメンタル・サイトの眼を使う。向かつてきた二人を武術で気絶させる。深雪が逃げた壬生に魔法を放とうとするが達也が止めさせる

「お兄様、拘束せずともいいのですか？」

「視界が十分でないここで無理をする必要はない。それに……」

壬生が逃げた先にいたのは一人の女子生徒

「彼女が逃げた先には、エリカがいる」

――

――

――

校内の騒動が落ち着いていたのは夕方だった。エリカと対峙した壬生はエリカに負け保健室に、そこで摩利に言われた「私ではお前の相手は務まらない」の意味が勘違いだっ

た事に気付いて泣き崩れる壬生。そこに後片付けを終えたフォルトが十文字と真由美と一緒に入ってきた。因みに外の残骸はフォルトが纏めて小さく丸めて爆散させました

「よーつす、お疲れー」

「フォルト、会長に十文字会頭」

「よくやったな司波」

「お疲れ、達也君」

壬生の仕出かした事で警察に出すべきという意見が出たが、家裁送りにして学校の威厳に関わると十文字が却下。達也から背後にいる『ブランシュ』を潰せばいいと意見が出る

「それは危険だ！学生の範疇を超えている！」

「いえ、やるのは俺ではありません。そうですね、会長」

「ええ、その件なただけど」

真由美が一步前が出る

「私達十師族とフォルト君で解決する事になったわ」

「どこでか？」

「みんなにはいいところ取りみたいで悪いけど」

「……なんか納得いかない」

「じゃあさ、来たい人は来てもいいよ。今から電話するよ」

重い空気にフォルトの声が響く。ポケットから端末を取り出してどこかに電話をかける

「……ああもしもし、俺だけど。この後やるアレの件なんだけさ……そう、急に出てきて横から搔つ攫うつてのも十師族の面目立たないじゃん？だから今回の関係者を連れて行くこうと……ああ？駄目？知らねえ。だったらデータ取るの許さねえぞ？電子機器ぐらい、というかお前らの使用人程度、何人でも殺せるが……おおそうか、ありがとよ、じゃ」

「……誰に電話したんだ？」

「九島」

「九島って……あの老師九島烈ですか？」

「そうだけど」

フォルトの、というか一高校生から出る名前じゃないと思った一同だが、相手がフォルトだという理由で流した

「それじゃ俺は先に行ってるから、後は任せた」

「おい、ちよつとま……はあ」

一人出ていったフォルトに呆れながらも、壬生を保健室に置いて十文字が用意した車で事前にフォルトに伝えられていた場所に向かって車を走らせた

—————

—————

—————

—————

『ブランシユ』の拠点である学校近くの廃工場の近くにバレないように車が数台停められている

「よう九島、早いな」

「昨日の今日で実行するとは、私の苦労も少しは考えて欲しいんだが」

「さて十師族関係者の皆さん」

「聞いてないし……」

「今日集まって貰ったのは聞いているだろう。中継、映像記録全くもって問題ない。好きなようにやってくれ」

集まっている中には手に撮影用カメラや端末を持っている者が大半で真由美と十文字も持っている。そんな中に制服でいる摩利達は居心地が悪いだろう

「一から十の関係者が勢揃いとは、アイツは一体何者なんだ」

「まあ老師にタメ口聞いてる奴ですし、あまり深く考えても」

「……そうだな」

「そんじやあお前達はそこで待つてろ、軽く終わらせてくるから。何人か残した方がいいか？」

「いや大丈夫だ、君が各拠点を知っている以上彼等に用は無い」

「了解……始めますか」

フォルトは当たり前のように空に浮かび上がっていく。その時点であちこちから驚きの声上がるが、既に知っている一高生徒達は特に何の反応もしない

廃工場の丁度中心まで移動したところで止まり魔法を準備する。まずは近隣住民にバレないように限定して存在偽証と消音の魔法を張る。その後自分の準備に入る

「これ使うのも久しぶりだな……モード・凍龍」

フォルトの全身を明るい水色のオーラが覆っている。下で見ている彼等にもそのサイオン濃度が感じ取れるぐらいに強い。そのオーラ全てがフォルトの右手人差し指に収束して一粒の雫が出来上がった。腕を伸ばして人差し指を突き出し雫が下に落ちるのを待つ。廃工場にいる見張りの兵でさえ、上にいるフォルトには気付いていない

「全て凍って砕け散るがいい、王の雫」

指から雫が落ちていく。その雫が建物に触れた瞬間、敷地内全てが凍った。出来上

がった氷山はフォルトがいる高さまで積み上がり、ダイアモンドダストになる程細かく砕けた

「……………」

「な、んだ、今の…………」

「…………人間の出来る範疇を超えている」

「流石だな…………」

「そうですね…………」

突然出来た氷山に言葉を失う者、人の身では明らかに出来ない事に恐怖する者、砕け散った氷の美しさに目を奪われる者と反応は様々だった。今の光景を中継で見っていた各当主達は、フォルトを敵に回すのは自分たちの終焉を意味する事を理解した。それでいて、どうにか困めないかと画策している。その行為が、彼の怒りを買うことも知らずに

久しぶりに凍龍の力が使えたフォルトはご満悦で下に降りて行って、そのまま各方面から質問攻めにあつたが右から左に受け流して有耶無耶にした。特に真由美と摩利がうるさかつたが、そこも安定のスルー

斯くして、一連の騒動はフォルトの一撃で幕を閉じた

その日の夜、深雪から夕方の魔法をどうにか習得出来ないかと言われたが

「自分の全サイオンを指先に凝縮出来るくらい繊細なコントロールが出来るならな」
と言われて取り敢えずのところは諦めたが、やる気の炎が目に宿っているのが幻視で
きたとフォルトは言っていた。それに付き合わされる達也に、フォルトは心の中で合掌
しといた